北支

昭和十四年七月四日第三種郵便物認可
昭和十六年一月十五日印刷納本
昭和十六年二月一日發行（毎月一回一日發行）第二十一號



現地編輯

THE NORTH CHINA

2

3

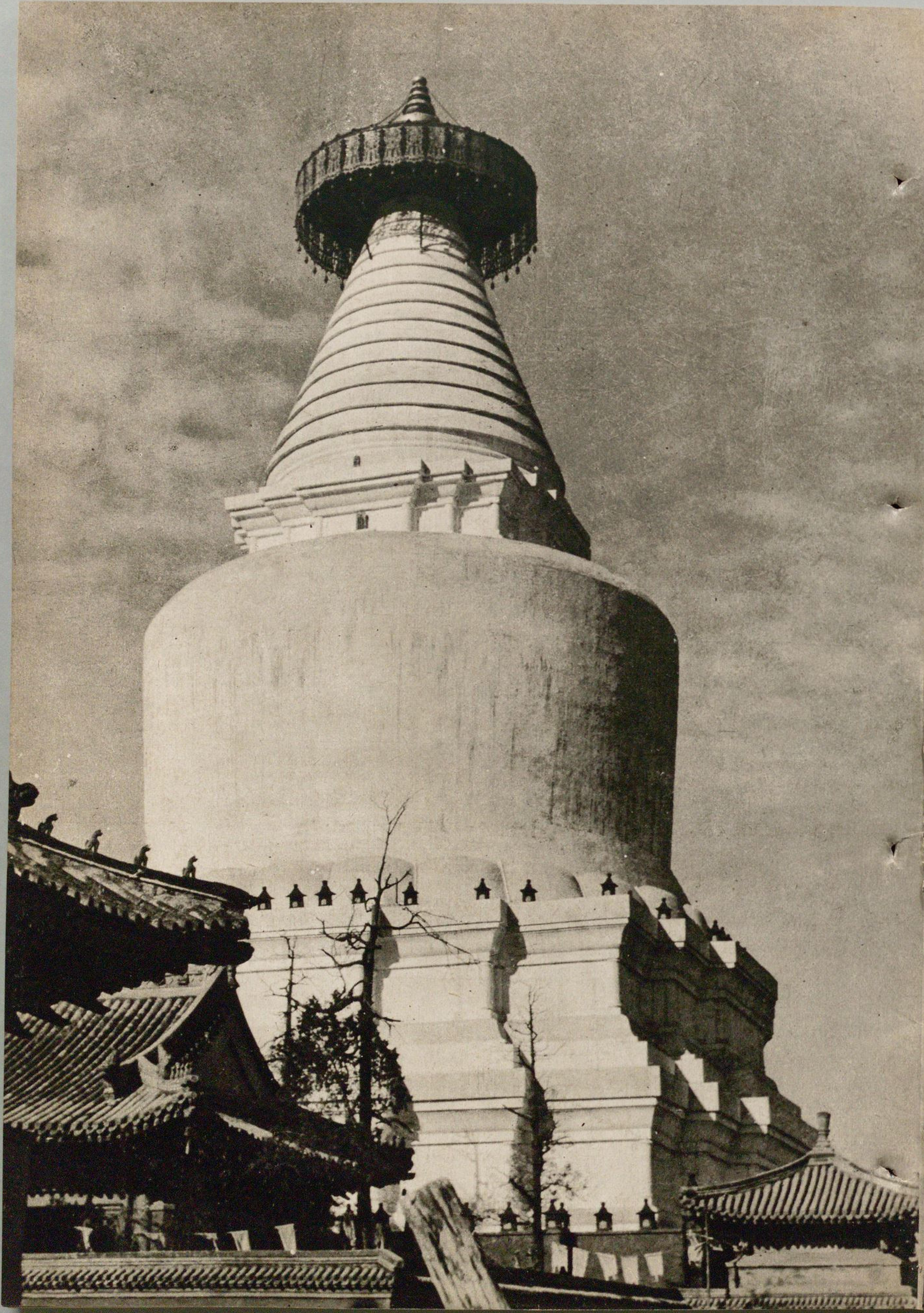
北京　白塔寺の廟會

その一

Festival at the White Pagoda Temple, Peking

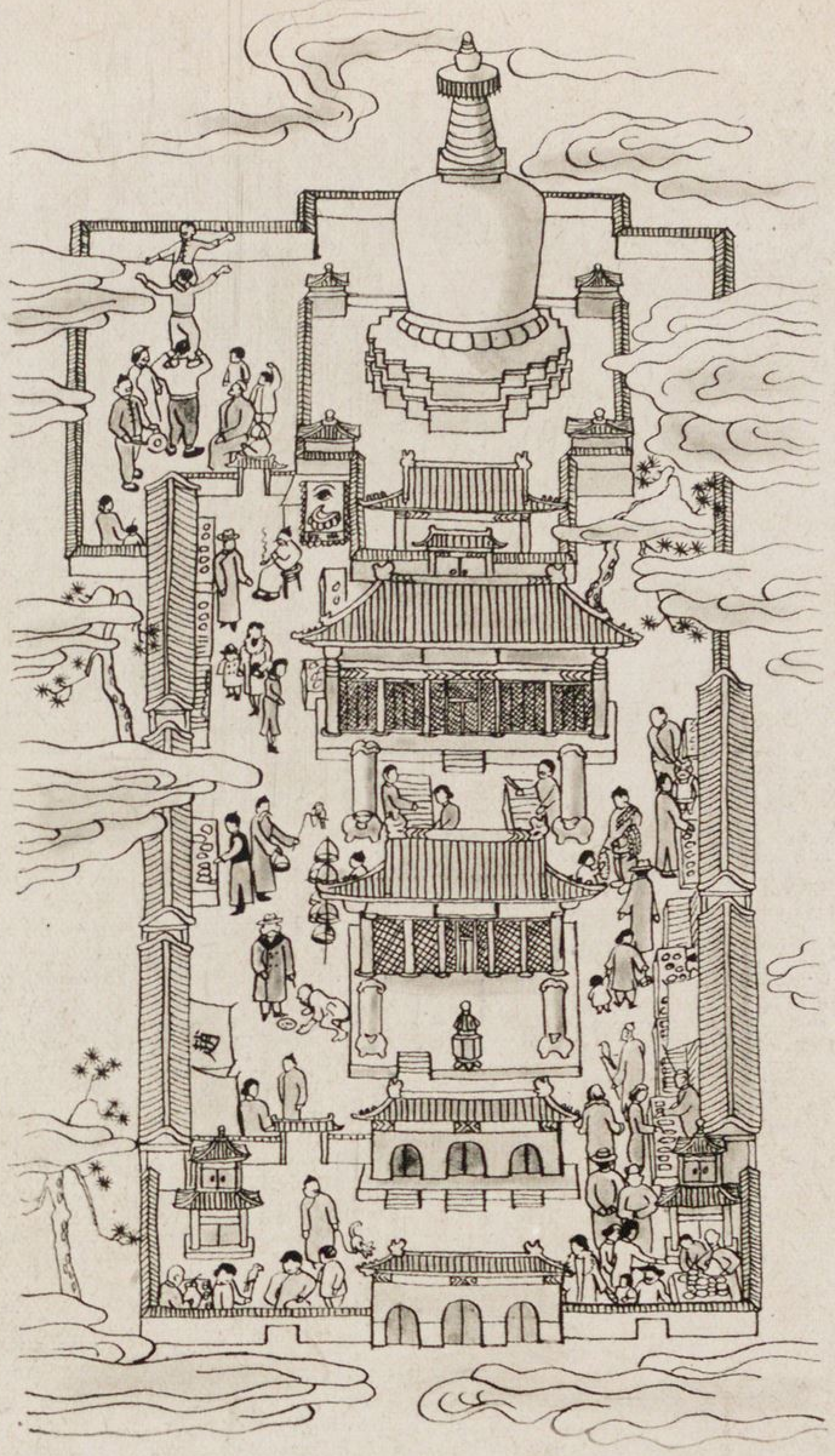


廟會の群衆



白塔寺

その二



北京で高いところに登つて、西の方を望めば、屋根また屋根の浪間はるかにそびゆる純白の喇嘛塔がある、これが西城阜成門内の白塔寺である。お寺の縁日を兼ねて市が立つが、これは東城隆福寺の廟市と共に定期廟市の雙璧をなしてゐる。あらもの、こまもの、反物、金物、草花、骨董、玩具その他世帶道具などありとあらゆる露店屋臺が境内一ぱいに店を張る。犬猫まで賣つてゐる、小鳥の市は特に日本人には珍らしい。芝居、曲藝、手品師など蝟集して、たいへんなにぎはひである



露店お醫者



山楂子賣り

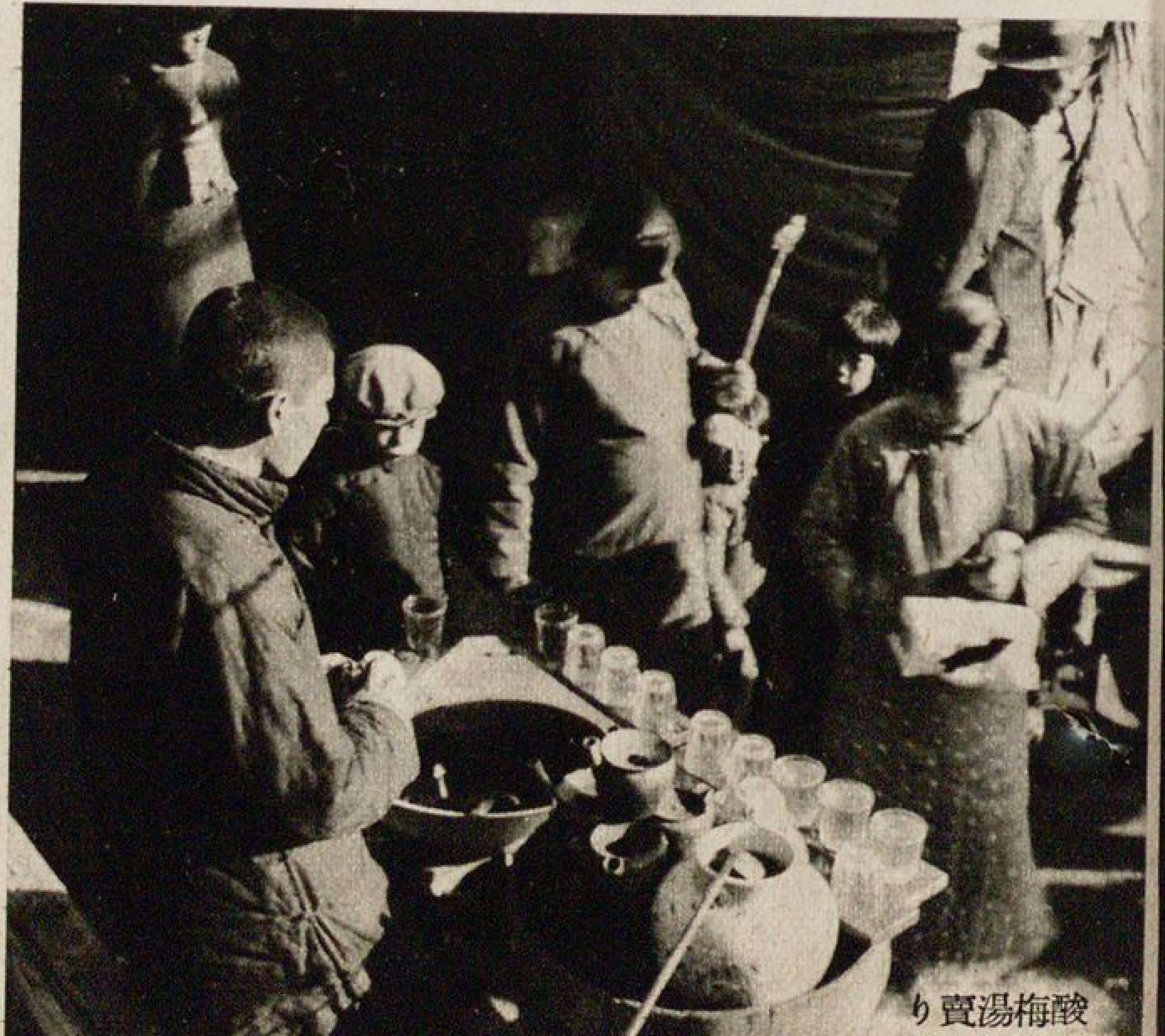

群衆


かるわざ


のぞき


獨樂賣り


賣卜者


酸梅湯賣り

小鳥

中國人が小鳥を愛するのは日本人のいはゆる風流と解釋すべきものではないそれは一種の虚榮であつて、こんなに生活の餘裕を持つてゐるのだぞと誇示する積りらしい――その様な意見を聞いたが穿ち過ぎた感がある。これは理窟を抜きにした形式主義から生れた趣味であらう。とにかく金持は金持なりに、貧者は貧者なりに小鳥を愛玩する風俗は廣く行亙つた事實だ。例へば子供は遊ぶことがそのまま生活であるやうに、彼等の生活の一部分をなしてゐるのである。おそらく世界中で中國人程、動物を馴らすことに妙を得た國民はあるまい

朝がた北京の城門外の茶店をのぞいてみるとおほかた悠々閑々たる顔をした老人達が鳥籠を前にしてお茶を飲んでゐる。又隆福寺や白塔寺の廟市には必ず小鳥の市がつきものだ。中に調練の妙技を見せる男がゐて人氣を呼ぶ。それは全く手放しの小鳥に餌を投げ與へるので、小鳥はさツと空を切つて啣へて歸る

たまに失敗してそこらの電線にでもとまると、合圖をして呼び返すのだ

尙我々が驚くのは街頭屋臺店の商人が鳥籠を持ち歩く風景である。何れにせよ我々日本人には眞似の出來ない悠長さではないか



包頭にて



北京白塔寺にて

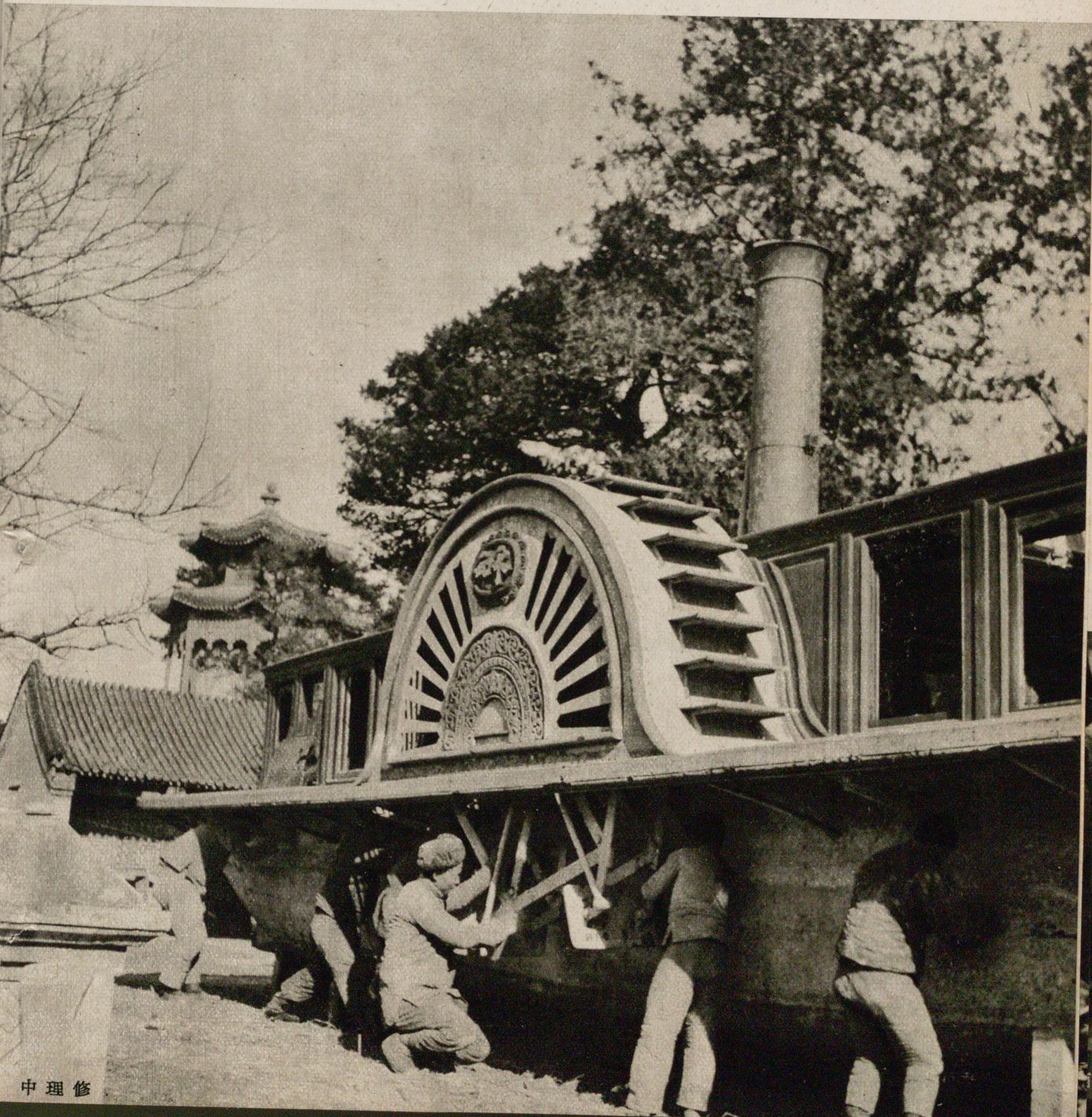
Pet birds



北京隆福寺にて

蘇る西太后の
永和號

The YUNGHO, the Historical Boat Salvaged From the Bottom of the Summer Palace Lake



修理中



半身を水中に沒してゐる永和號――裏萬壽山昆明湖

つい最近まで北京郊外萬壽山の麓、昆明湖の西北隅に、半身を水中に沒した古ぼけた一隻の遊覽船があつた

これは今から三十三年前、日本から時の清國西太后に贈呈した由緒深いもので、明治三十七、八年日露戰爭當時、清國から多數の山東鹽が日本へ送られた返禮としてわが大藏省が川崎造船所に命じ、十萬圓といふ當時としては非常な巨額な工費を費して造らせたものである。全長六十七呎、幅一四・八呎、總トン數二五・九トン、速力六ノットの鋼鐵製外輪式小型遊覽船で船首には清國皇室の紋章である黃龍の彫刻、前部客室は太后御座船に相應しい机、椅子、ソフア、兩舷角窓の間には鏡、床には絨氈を張り詰め窓のカーテンから机掛まで一切を設備した豪華船である

明治四十一年五月廿七日、意義深い海軍記念日を卜し北京宮城內にて、數百名の日清顯官、貴紳參列の下に盛大な贈呈式が嚴かに行はれた。淸國はこれを「永和號」と名づけて昆明湖に浮べ西太后は四季折々宦官達を引き連れ舟遊に興じたといふ

この度時代の脚光を浴び、その名の如く兩國親交の絆として、水中より引揚げ改裝の上、日華親善を物語る好個の記念物として保存されることとなつた

張家口

その一

KALGAN, Mengchiang



市街展望



街頭所見

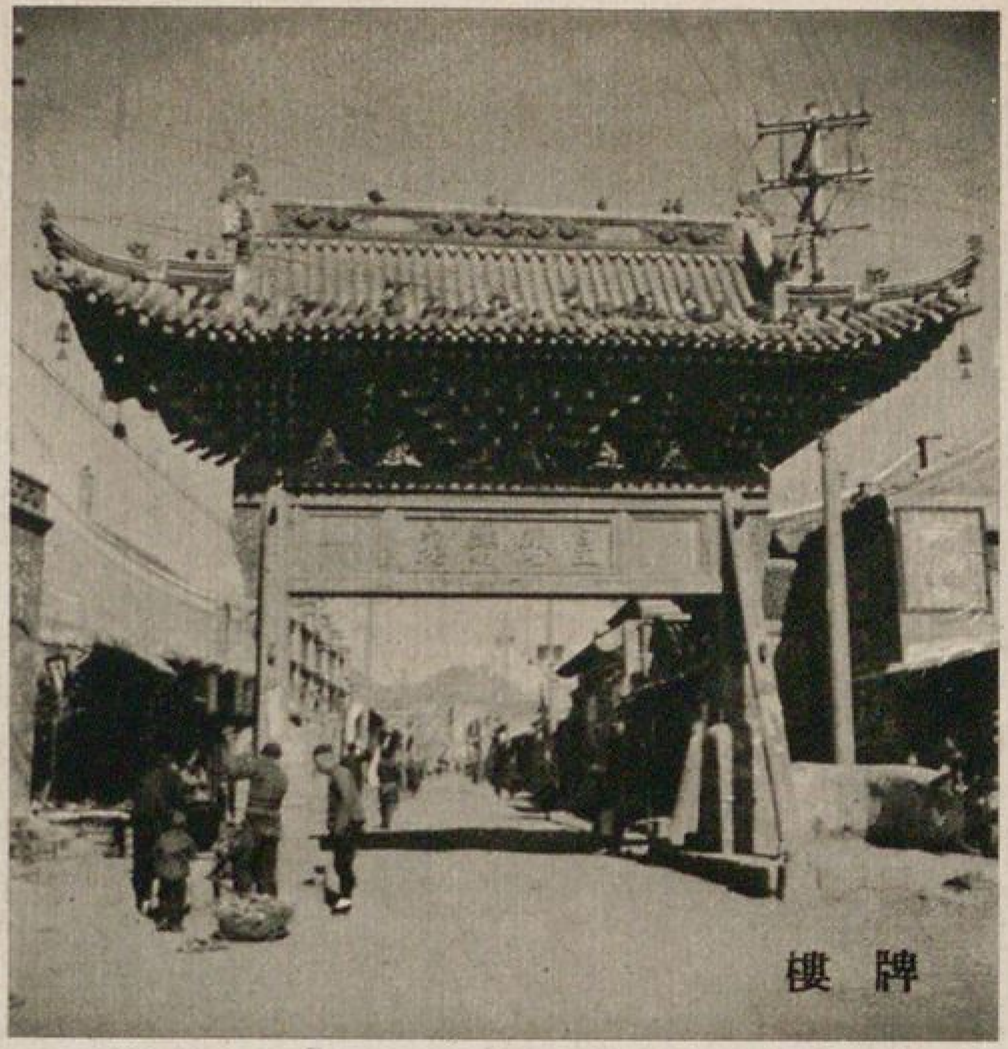
張家口の街から買物をして奥地へ歸る蒙古人——大境門外にて



海から來た文化に依り近代化した支那の今日からは想像困難であるが、昔は支那の玄關は西方、大陸奥地に面してゐた。宋朝以前に於ては、東西文化は大體、天山南、北路の所謂シルク・ルートに據り交流したのである

張家口の名が生れたのは明朝の成化十年であり、都城の建設が始められたのは同じく明の宣德四年、今から約五百年前であるから、曾てのシルク・ルートに於ける地位は重視されないにしても、張家口の地は漢代に於ける代郡北塞以來の軍事的要衝で明朝以來は漢人勢力蒙古浸潤の據地として、又、支那と蒙古との、或はロシヤと支那との交易上の要地として經濟的にも重きをなして來た

張家口 その二


牌樓


羊皮をなめす

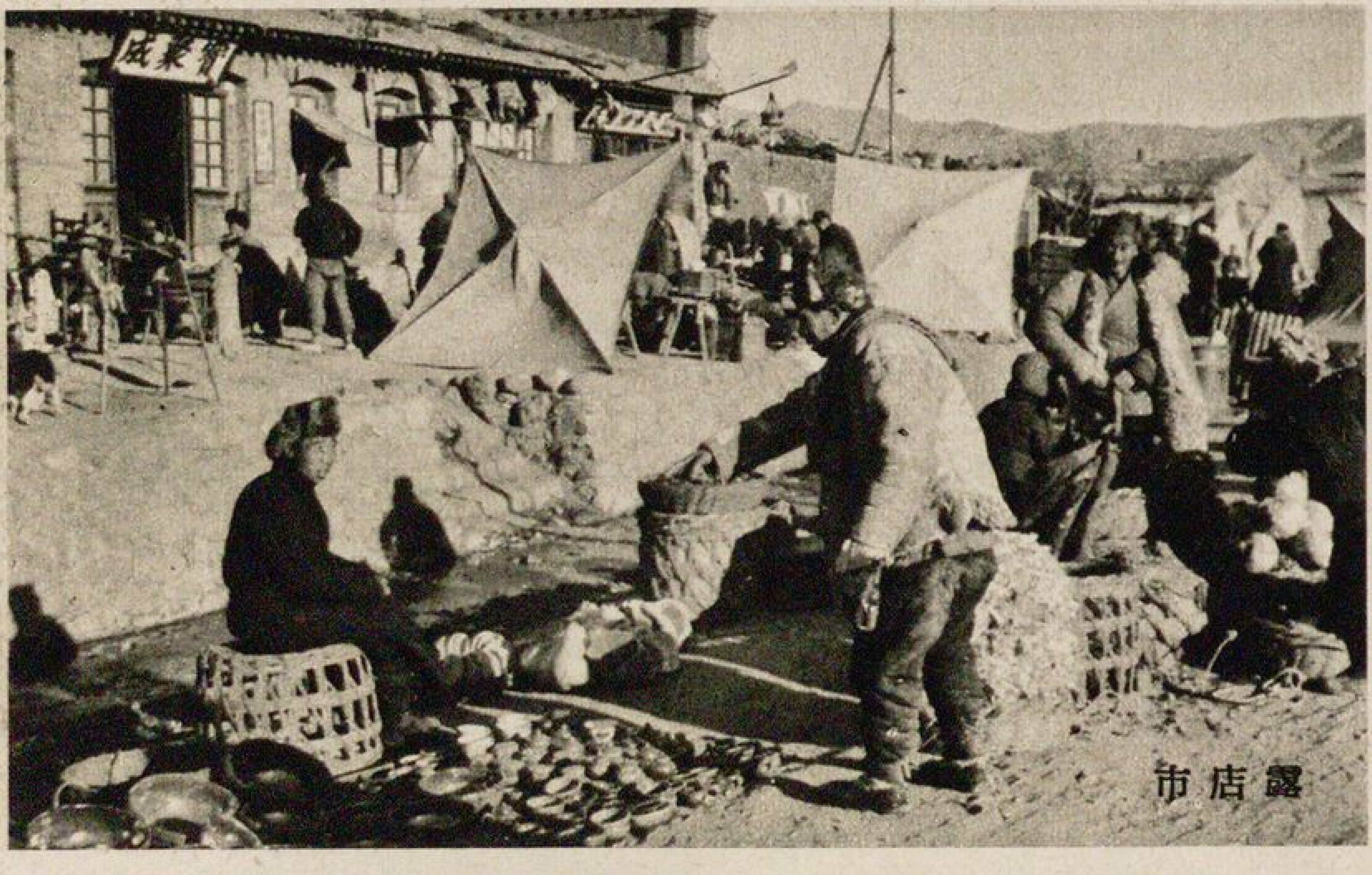
外國人は蒙古語で「陸の港」を意味するカルガンといふ耳當りのいゝ名稱で張家口を呼んでゐる。日本の勢力が西進して、シルク・ルートが再開せられつゝあり、支那の西向玄關としての張家口の、その登場の步武亦動き始めた今日、陸の港はまたうつてつけの名前ではないか

支那事變以來の張家口は、蒙古聯合政府の所在地となつて新興國家の首都となり、經濟的には蒙、支の交易市場たるの地步を持續し、背後地からの畜類畜產品、天然曹達、藥草、藥材等、北京、天津方面からの綿布、雜貨を主とする加工物資は一應こゝに集められ、取引、消費市場としての經濟面を强化しつゝある

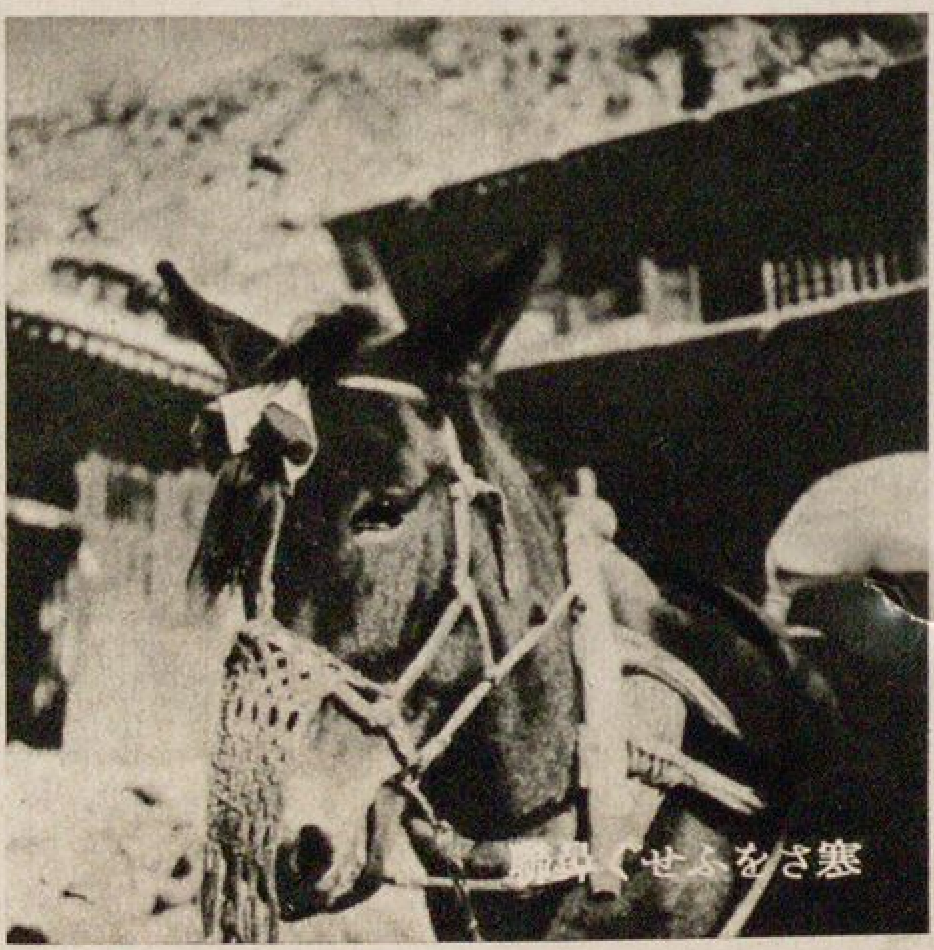
張家口の人口十一萬、内邦人一萬五千。北、西北、東北の三方を蒙古臺地の周緣をなす山連に圍まれ、淸河と稱する程よい流を跨いだ街は駱駝臭い。その石疊の路は幾百年の間、幾千萬頭の駱駝の、あのパタツとした足に蹈みつけられて來たことか。張家口一帶には約七萬頭の駱駝が使役されてゐると謂ふ


朝





露店市



寒さをふせぐ[illegible]



Chinese Floral Designs

花様（ふわやん）

周知のやうにと我々は云ふけれども、實際に北京に來て見てなる程中國文化の淵叢だと思ひ知るのである。殊に圖案意匠の複雜精巧さを眼のあたりみて驚かぬ者はあるまい。數多の民族を抱擁し悠久五千年の歴史を持つて洗煉され様式化されたそれは世界に冠たりと云うても過言ではない。明治以來西歐文化の吸收に追はれた日本は眼前の寶玉を全く忘れてゐたのだ。最近日本の圖案意匠は殆んど生硬、消化不良の醜態をさらしてゐるではないか。加之、北京に於ける小中學教授の現狀を見るに之亦日本より甚だしい師祖忘却である中國美術工藝の殷盛は各朝それぞれ特殊性を持つて來たが、その間に異民族の文化、西歐の文化をも吸收消化してゐる。淸朝康熙帝は工藝全般にわたり積極的に奬勵されたが、不幸にして其後混迷動搖常ならぬ世情となつて現在の衰微を來したのである

さて花様と云ふのは刺繡の型紙に使ふのが普通であるが、任意に障子や窓硝子に貼付けて飾つたのも見受ける。北京では隆福寺や白塔寺の定期の廟市とか、何かのお祭で人が集る場合には必ず一人位はこの花様賣が店を出す。それも至極簡單にショウウインド代りの板片に布を張り一通りの見本を貼並べてゐるだけだ。商賣そのものは貧相であるがその切抜かれた圖案の完成された優秀さに驚かざるを得ない。而もそれは中國圖案意匠の代表的な骨格見本とも云へよう。（正月前後に賣出す特殊なものを除けば、白か赤の單色紙を切抜いたものだ）從つて圖案の內容は中國圖案の特徵として史實や傳說、迷信緣起に類するものが多く、様式化の技法は飽迄自由奔放にして且つ適確である。西洋風な寫實とは全く肌合の違つた東洋そのものの神經が創造したものと思ふ

花様の製造元は天津に大掛りにやる店が二三軒ある。圖案の種は粉本を持つてゐて、それに從つて描き寫し二三十枚の紙を重ねてグングン彫り切つて行く。見てゐると職人らしい實に鮮かな手腕である



花様を型紙にして刺繡をする

鐵條網を飛び越える訓練

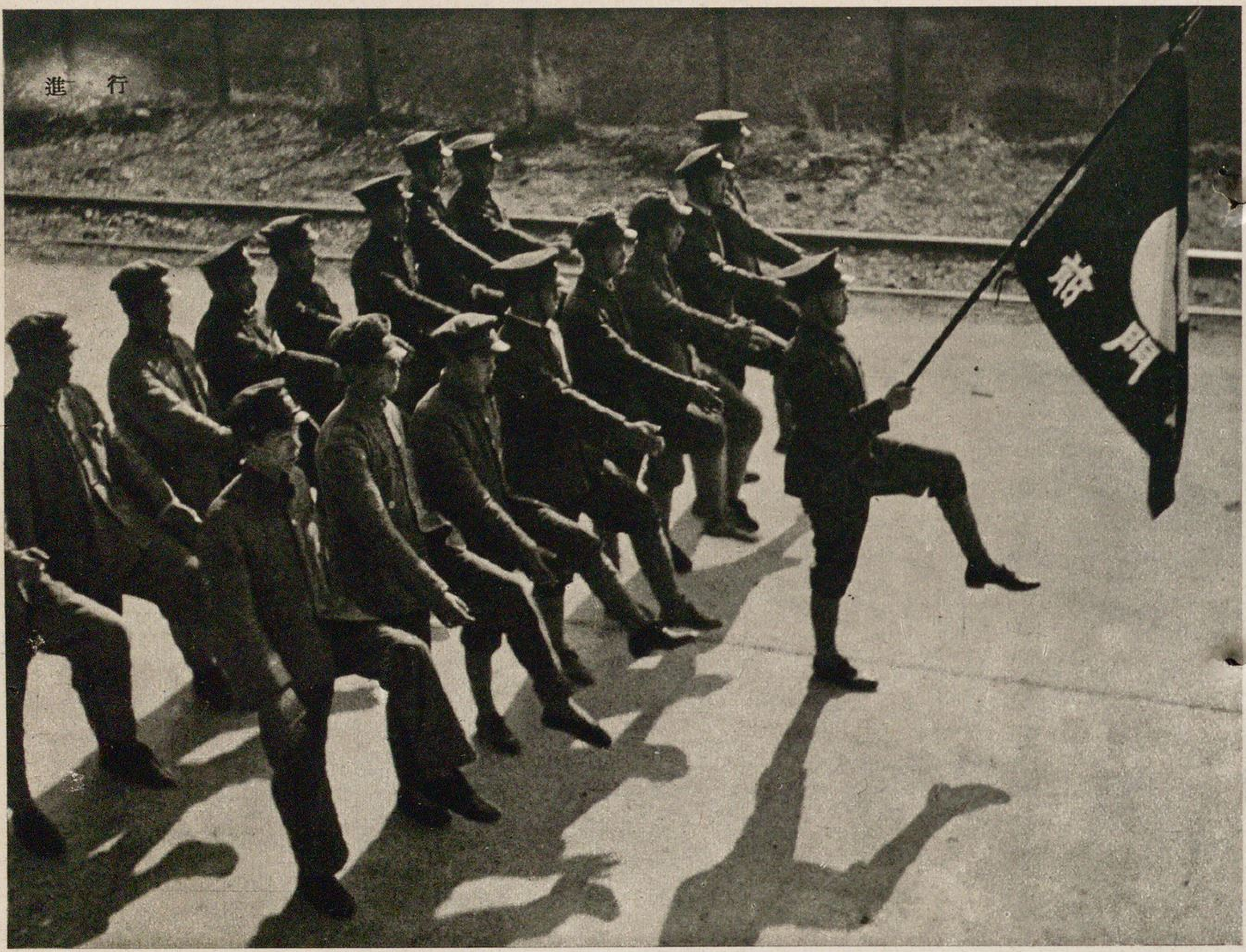


華北交通
中國人鐵道青年隊

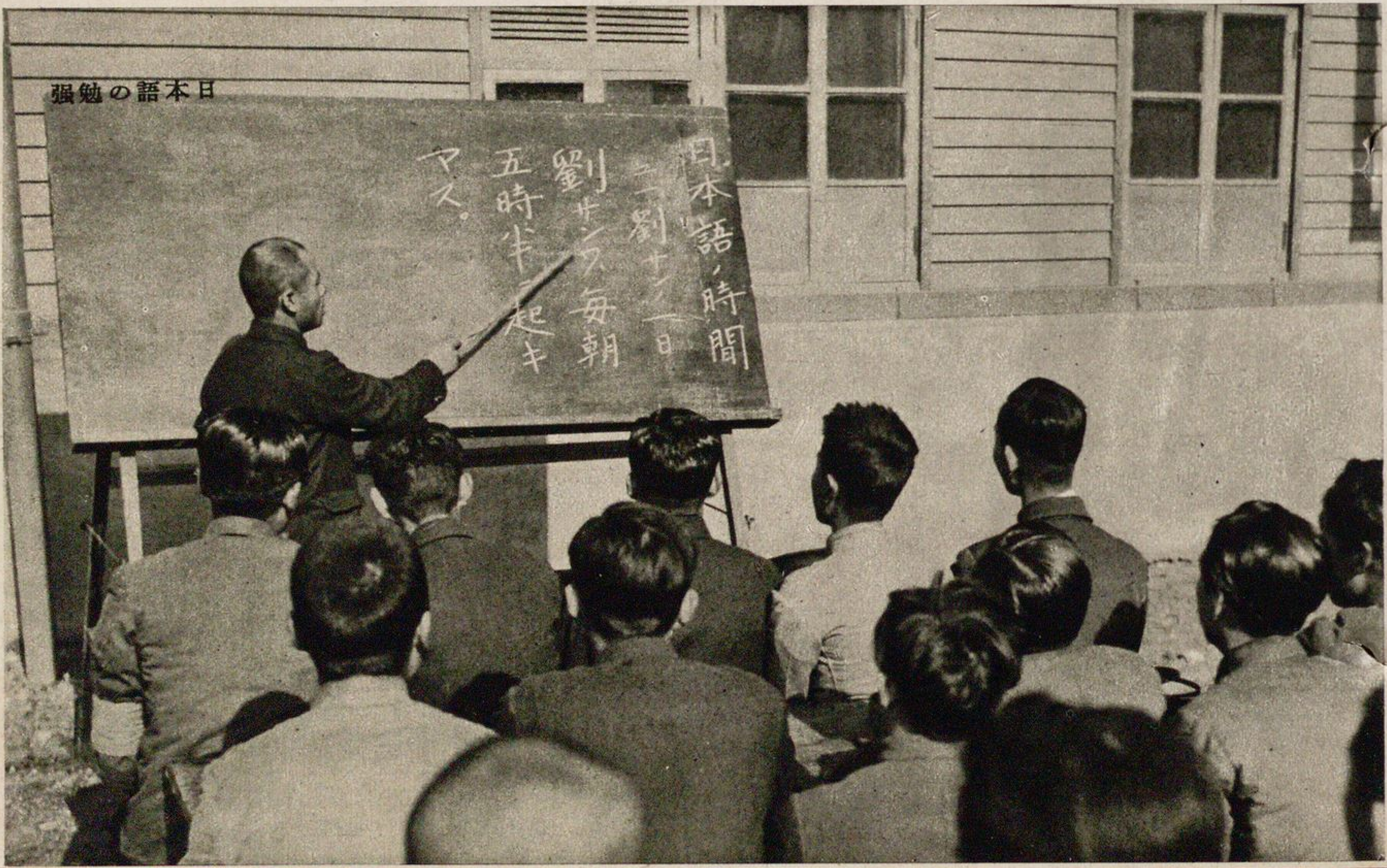
華北交通會社三萬の日人社員中二十一歳より二十五歳迄の獨身社員によつて組織されてゐる鐵道青年隊が社業の大なる推進力となつてゐることに刺戟され（北支昨年十一月號掲載）七萬の華人社員の青年層より中國人による鐵道青年隊結成の要望はげしく、昨年十一月北京の貨物驛である前門驛の中國青年從事員によつてまづうぶ聲があげられた

彼等はまづ日人社員の規律遵守、嚴正なる態度を習得するため訓練と日本語習得を主な科目とし號令、命令は總て日本語によつてゐる。日本人の態度並びに日本語を知悉することにより日本精神の本質をつかみ日人鐵道青年隊と協力して新東亞建設に社業を通じて邁進しようとの意氣込みである

Railway Protection Corps of Chinese youth, N. C. R.



行進



日本語の勉強

立喰ひ

Portable Restaurants, Peking Streets.



北京西牌樓



北京前門

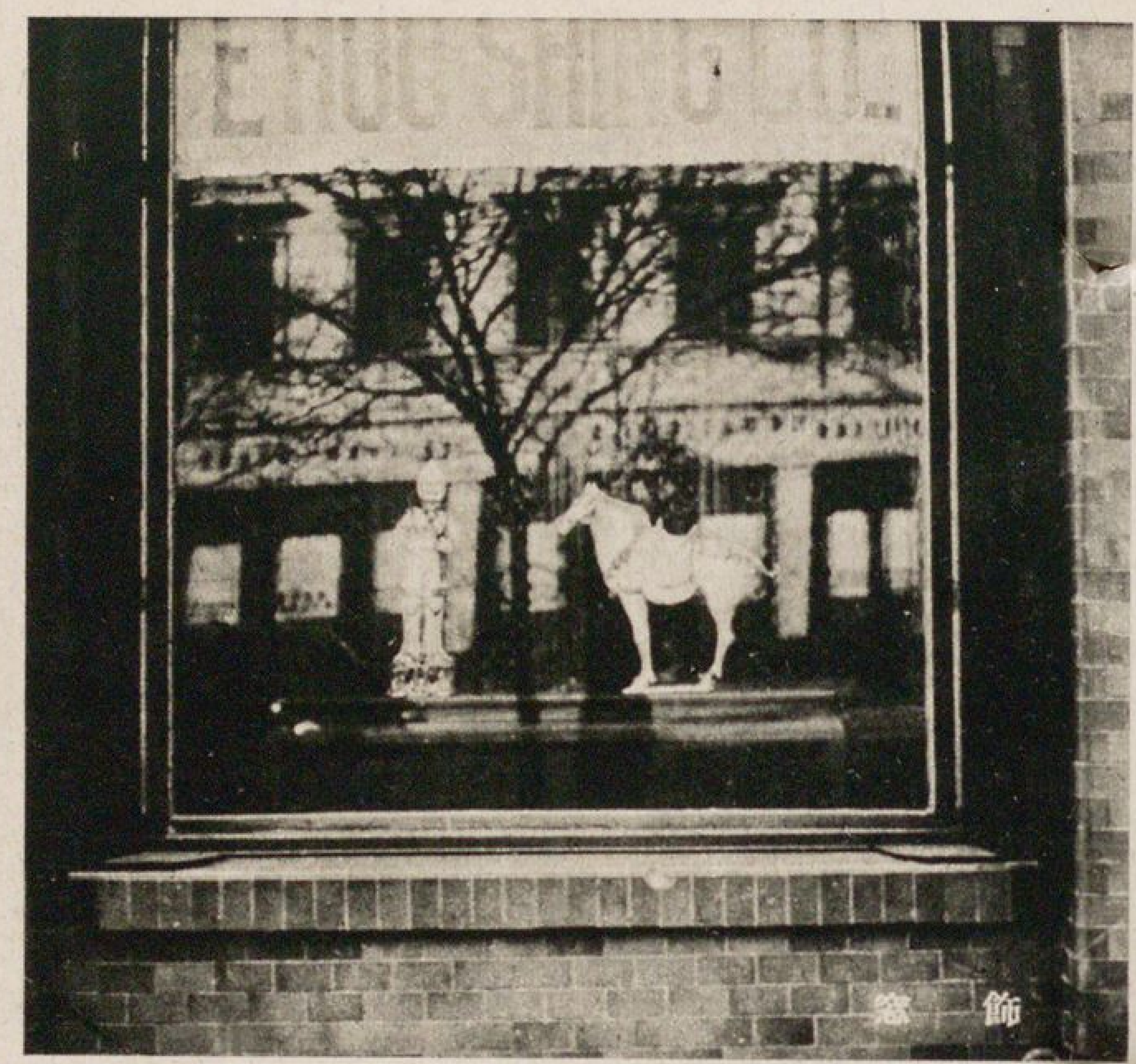
骨董製作

北京

Imitation Curios in Process of Manufacture,

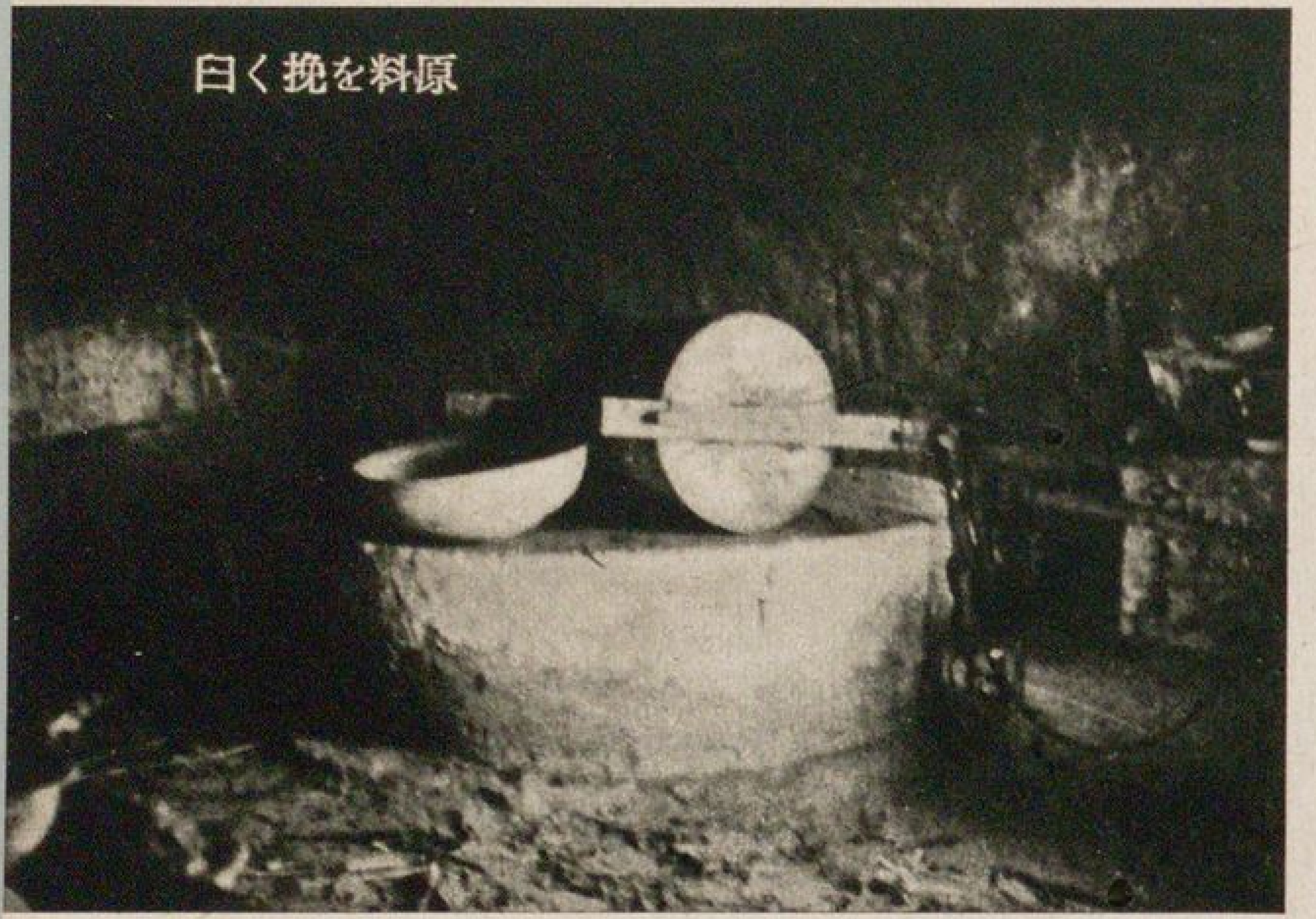


製作品



飾窓

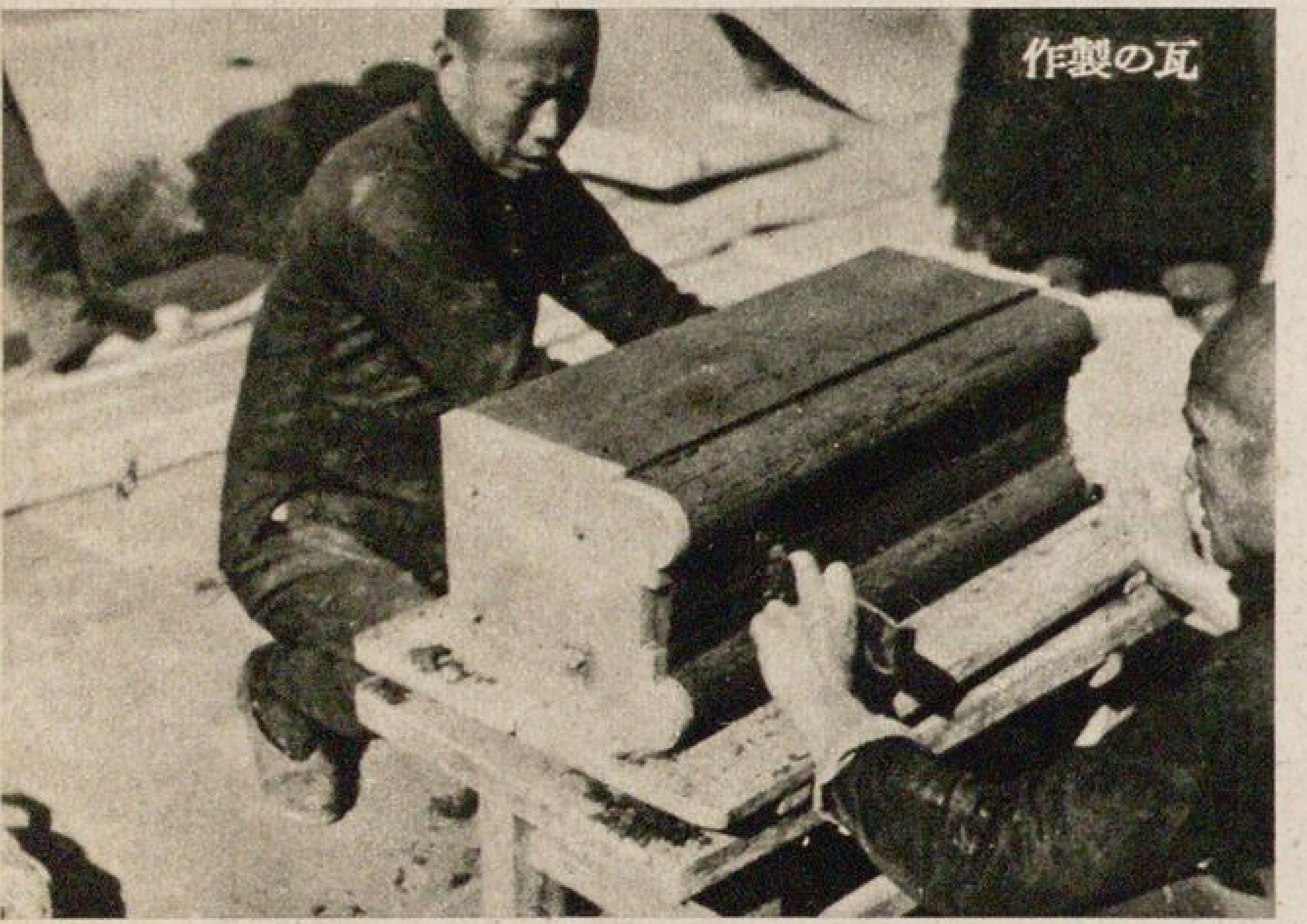
北京東郊約六粁大亮馬橋に數軒の窯元がある。その中には明朝からの窯も殘つてゐる。現在燒いてゐるものゝ多くは琉璃、黃、綠釉の瓦や甕等で、其他琉璃廠あたりの骨董屋に素人目にはその頃のものと思はれさうな唐三彩等、軟火釉のものも燒いてゐる。美麗な琉璃、黃、綠釉の掛つた瓦や裝飾煉瓦の胎土には、北京西郊西山の可塑性の少い木節粘土に似た土が用ひられ、唐宋朝の仿造品や鉢や甕等の轆轤ものにはその胎質と可塑性が地場附近の赤土に求められてゐる。西山の土は驢馬が引く石のローラーで細かく碎き、篩にかけて、工場の一隅に掘られた溜場に水と一緒に流し込んで幾日も天日に乾かして用ひ、赤土は水簸して使はれる。瓦や裝飾煉瓦等は木型で鐵箆とコテ位で巧に仕上げ、小物等には素燒型を使つてゐる。轆轤は左廻りの部厚な石製で土の練り方も轆轤の技も、尾張、瀨戶や美濃地方で年期を入れた職人達と全く同じであるのは面白い。窯は北方特有の平地窯である。燃料は雜木が主で多少石炭も混ぜて焚く。設備や工程は遠く唐山や博山等の比でなく、世人に忘れられた樣なさゝやかなこの工房では、熟練の陶工達が傳統の手法を守つて今なほ造り續けてゐるのである



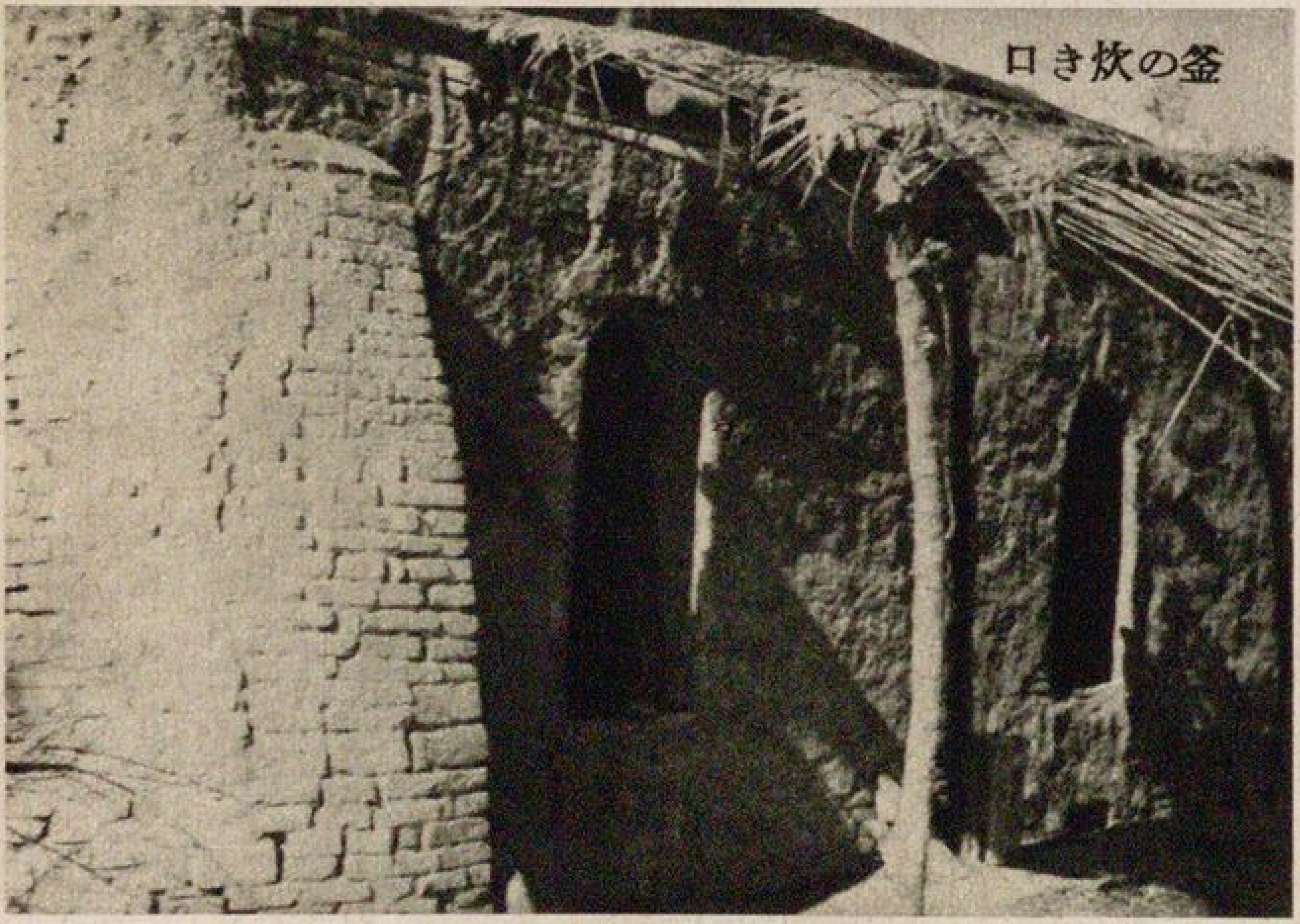
原料を挽く臼



壺の製作



瓦の製作



釜の炊き口



子

供

張

北



hinese Children, Chang
ei Hsien.

發掘すゝむ大同の石佛

大同の石佛は今を去る約千五百年以前北魏王朝に依つて造營されたものである。世界的な佛教美術の寶庫として、一部の人々の間には早くから知られて居たが、今次事變に皇軍が保護し一般にも容易にこれに接す可き機會が與へられ、そして我が飛鳥・奈良朝の絢爛たる佛教藝術の源流として親しまれる樣になり、今日では一度支那を踏む者の誰しもが訪れる可き有名なものとなつて居る

昨年以來晋北政廳では史蹟の保存と觀光とに對する具體的施設を行ふことゝなり、今秋は整地排水等の工事に力を注いだ。その際學術的な調査をも兼ねることゝした結果、今迄明かでなかつた點の確め得られたことも尠くない

先づ膝迄埋沒して居た大露佛が發掘され、其の全貌を現したことである。著しく風化を蒙つては居るが、下部も亦全體に對して均勢が保たれた堂々たるもので、石佛中代表的傑作たるの貫祿を愈〻發揮したのである、それと共に前々から推測されて居たのではあるがこれも最初からの露佛ではなく、他と同樣洞窟内に開鑿されたものであり、基部に岩層の脆弱なところがあつた爲

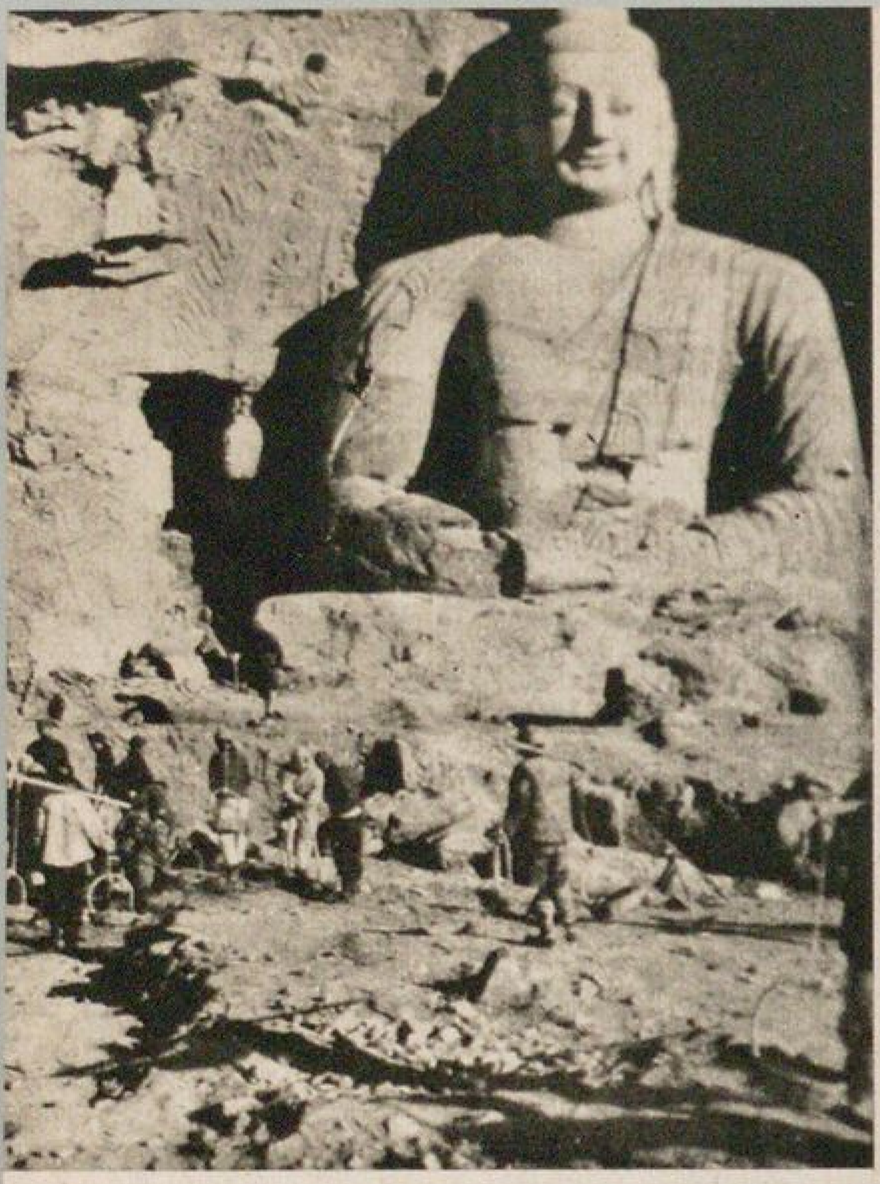
The Stone Buddha, TATUNG, Now Being Unearthed



發掘された蓮瓣瓦當



發掘された供養の菩薩——高サ一尺



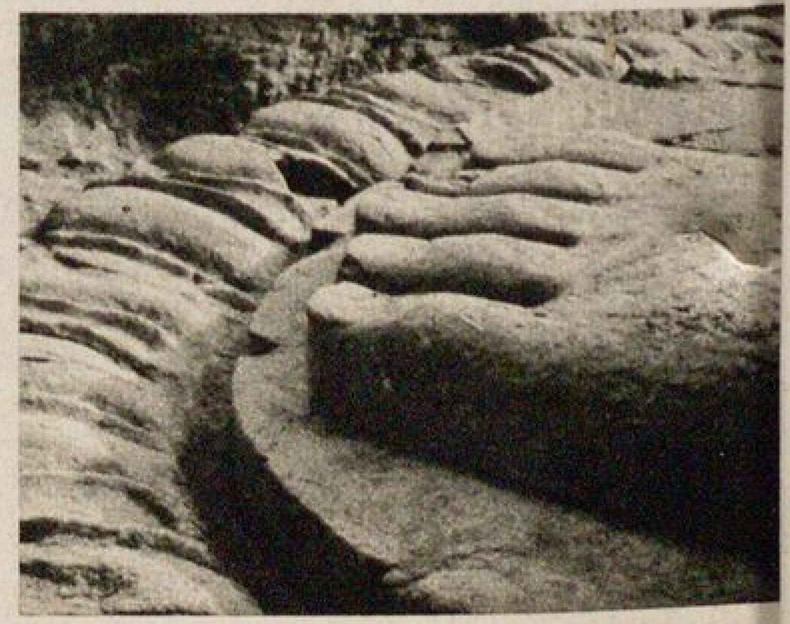
發掘工事



掘り出された大露佛の膝

に前壁が倒壞したのであることが確認された。猶この前面からは多數の岩石が現はれ、それには當初彫刻した千佛などの殘つて居るものも見受けられ、或はそれに混つて北魏時代の大きく厚い瓦の破片等も現はれた。蓮華の花を形取つた瓦當も一破片ではあるが出土した。これは今迄に知られて居る蓮瓣瓦當としては東洋最古のものである。

此の外、唯一個膝下の部分から當時使用された銅錢も得られた。第九窟や第十九窟の前面から古い煉瓦敷の現はれたことも注意に値する。それは遼代のものである。このことと他の點とを併せ考へると遼代にこの寺院は頗る尊崇保護され、寺運の隆盛だつたことが窺はれるのである。石窟の西部臺上の寺院址も調査された。小規模な發掘であつたが、此處からも亦傳祚無窮の四字を印した瓦當の外、蓮瓣瓦當、棰瓦、黄色の釉藥を塗つた瑠璃瓦等が發見され、その他壺鉢の土器類或は小刀などを得た。これらは悉く千五百年前の文化を推測す可き貴重な收穫であつたのである



あらはれた大露佛脇佛の足



蒙古高原

Cattle

支那では、牛は主として農耕地帯に飼育せられ小麥生産に不可缺の畜力として使役せられてゐるが蒙疆地方に於ても運搬用として重要な位置をしめダブスノール鹽湖の鹽牛等有名である

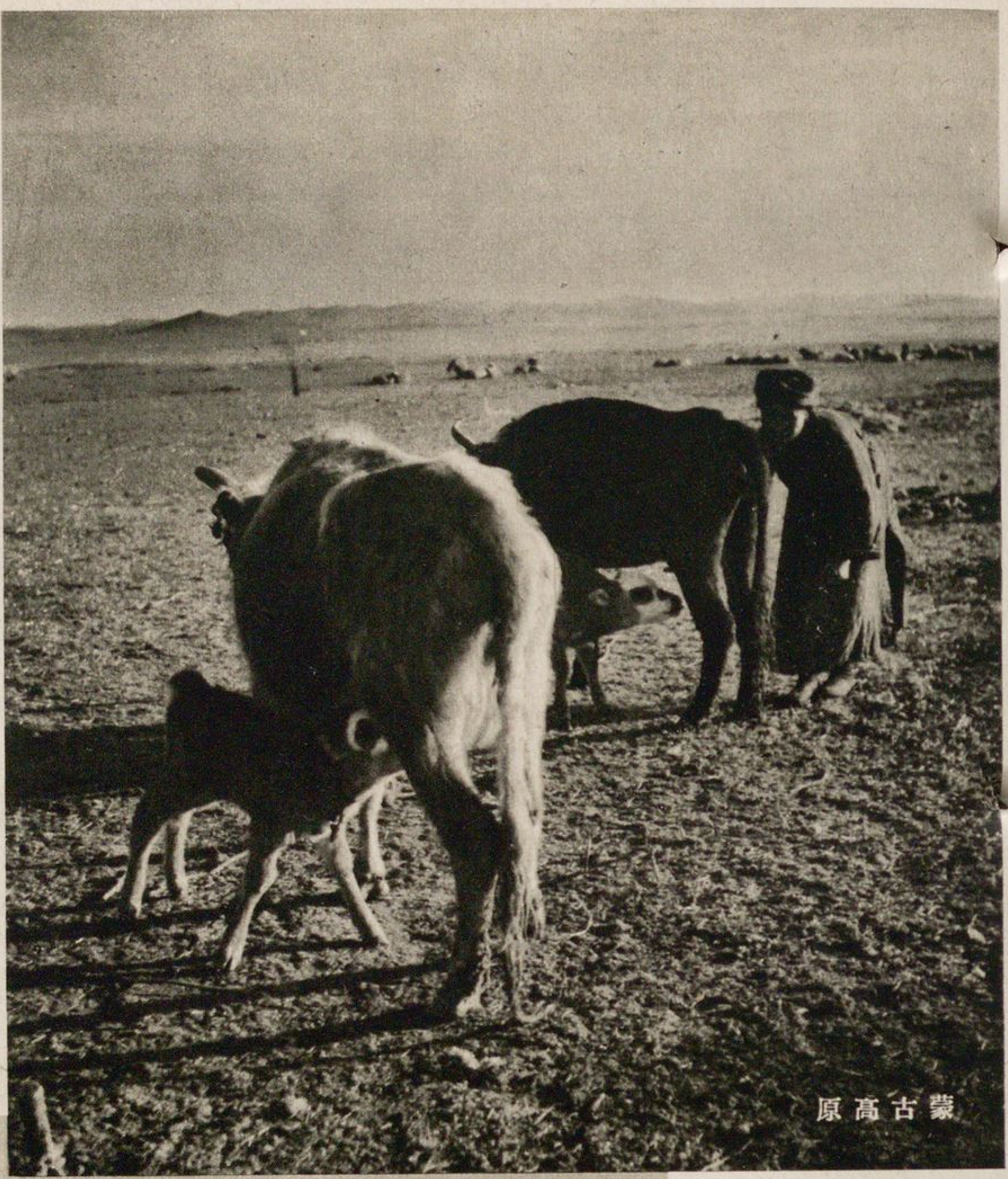
平原地方のものは山東牛、山西牛、或は河南、河北牛等、地域別に稱ばれてゐるが形態上同一特徴を有し、西藏、甘肅の高地産バンタン、ガウール、ガヤール種を原種とする中形黄牛と同一系統とせられてゐる

山東牛は肉用として有名であるが此は山東省の西部及び河南省北部に於て生産され黄河に沿つて北上しつゝ濟南で分れて一部は膠濟線北部一帶を移動し濰縣方面に於て肥育され青島に出て生牛又は生肉として輸出される。他の一部は濟南から更に北上を續け河北省に出て役畜として農耕に勞力・肥料を供給しつゝ天津に出て消費せられる

青島、濟南、京、津の都會地には少數乍ら乳牛が飼育せられ牛乳を供給してゐる

蒙疆に於ては獸糞は唯一の燃料であるが、牛糞が最も多く用ひられてゐる、この牛糞は春に採取され一年位乾燥したものを最良とし、冬のものは火保ちが惡く、形も崩れ易い、一戸の包(パオ)で消費する量は一牛車（百五十斤）を冬期は一日、夏は二三日位の割合である

牛



蒙古高原



牛皮の乾燥――青島



雨あがりの後のぬかるみ

北京の胡同（よこちやう）



洋車一臺やうやくはいれる胡同

The Peking Hutungs



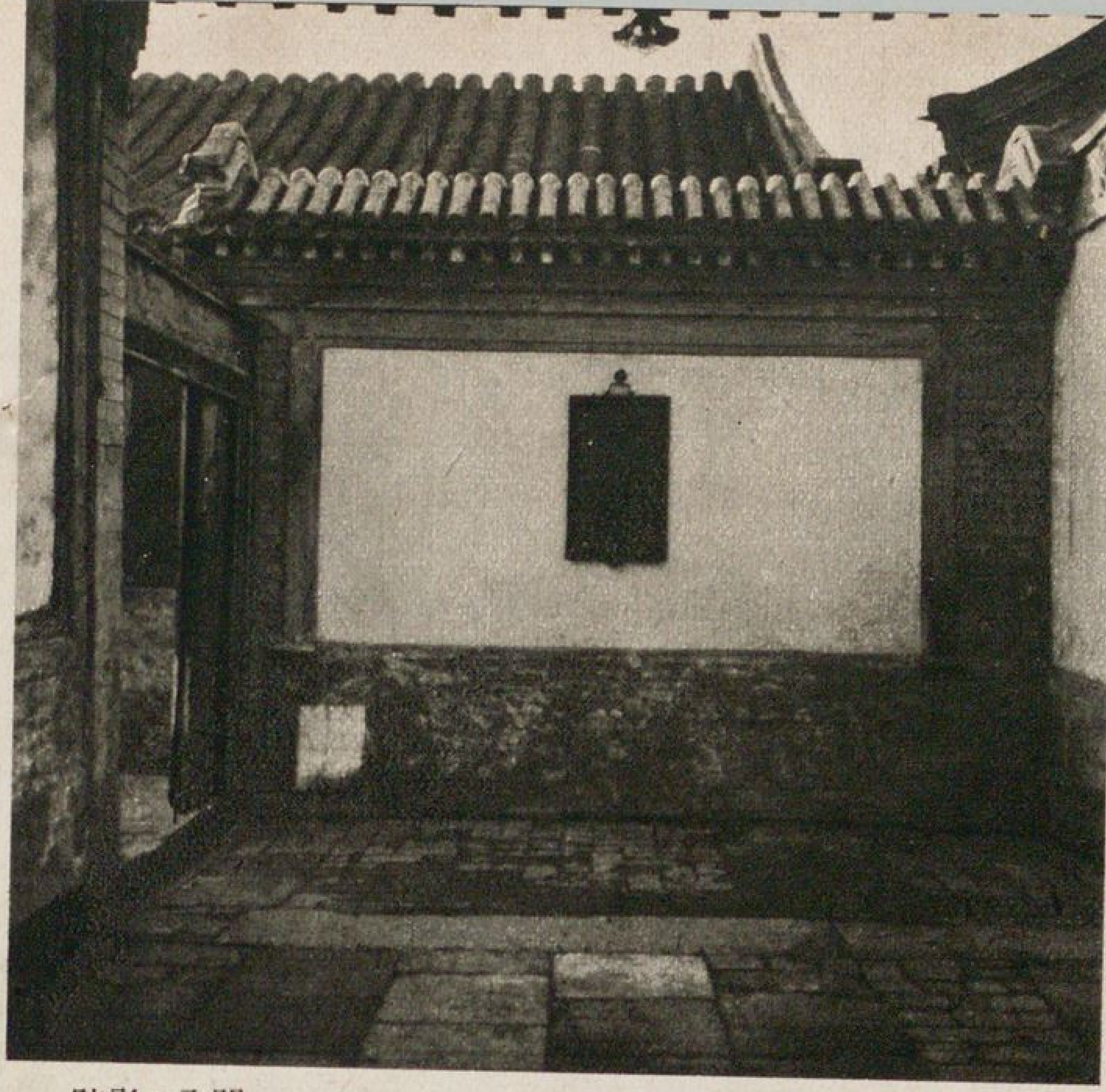
松

Pines

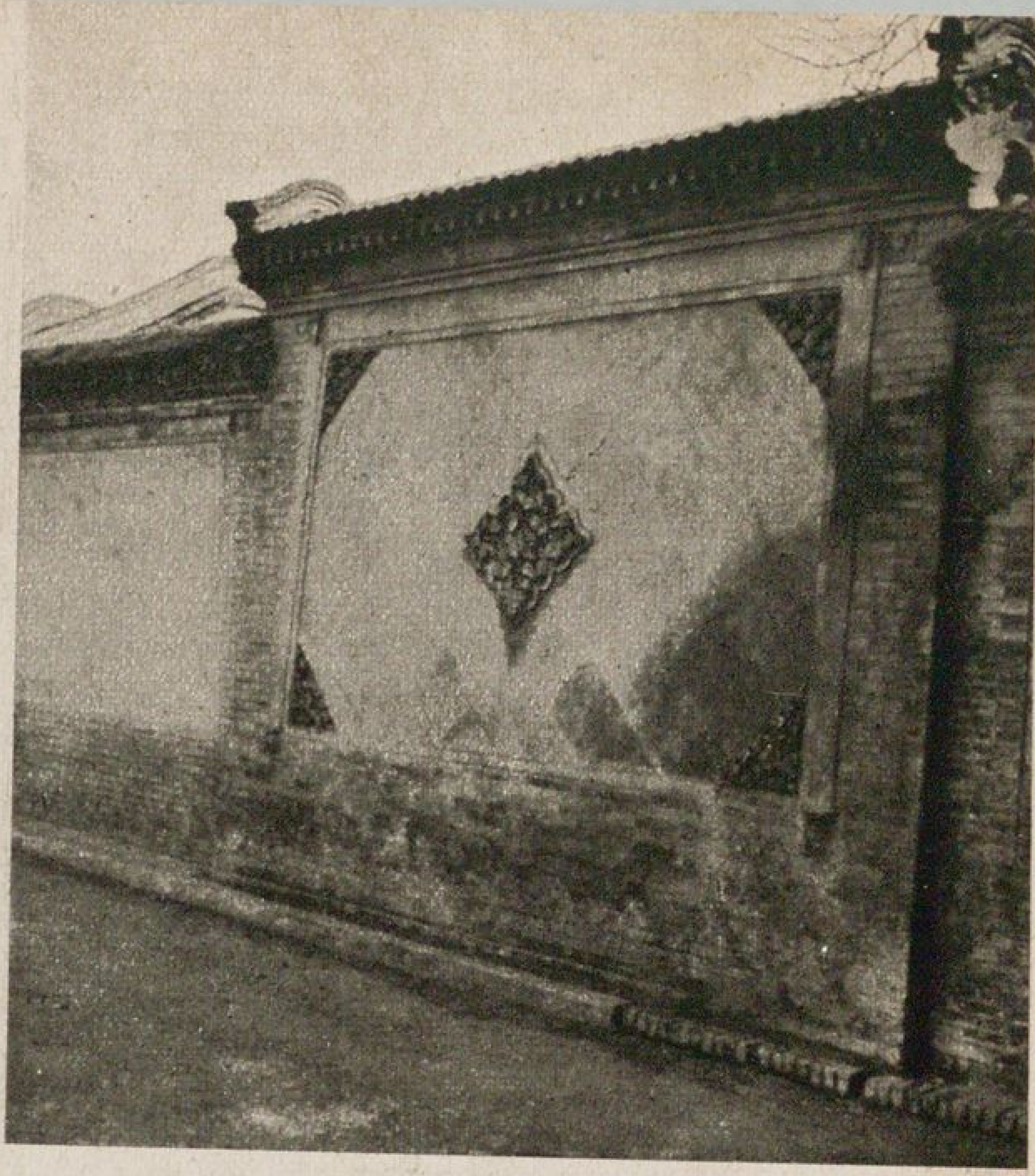
北支・蒙疆の松類は在來種と移入樹種とを合すれば十數種にも及び、天然林としても各地方に見受けることが出來る。松は寺廟の境內や墓地に柏とともに好んで栽植され、その風致を愛でられてゐる。青島や北膠河では松の人工造林に成功してゐるやうであるが、今後林政の確立と森林事業の勃興とによつてやがては北支・蒙疆の山野にも、母國日本のやうな松の美林が見られることであらう



山海關角山寺からの眺望



門內の影壁

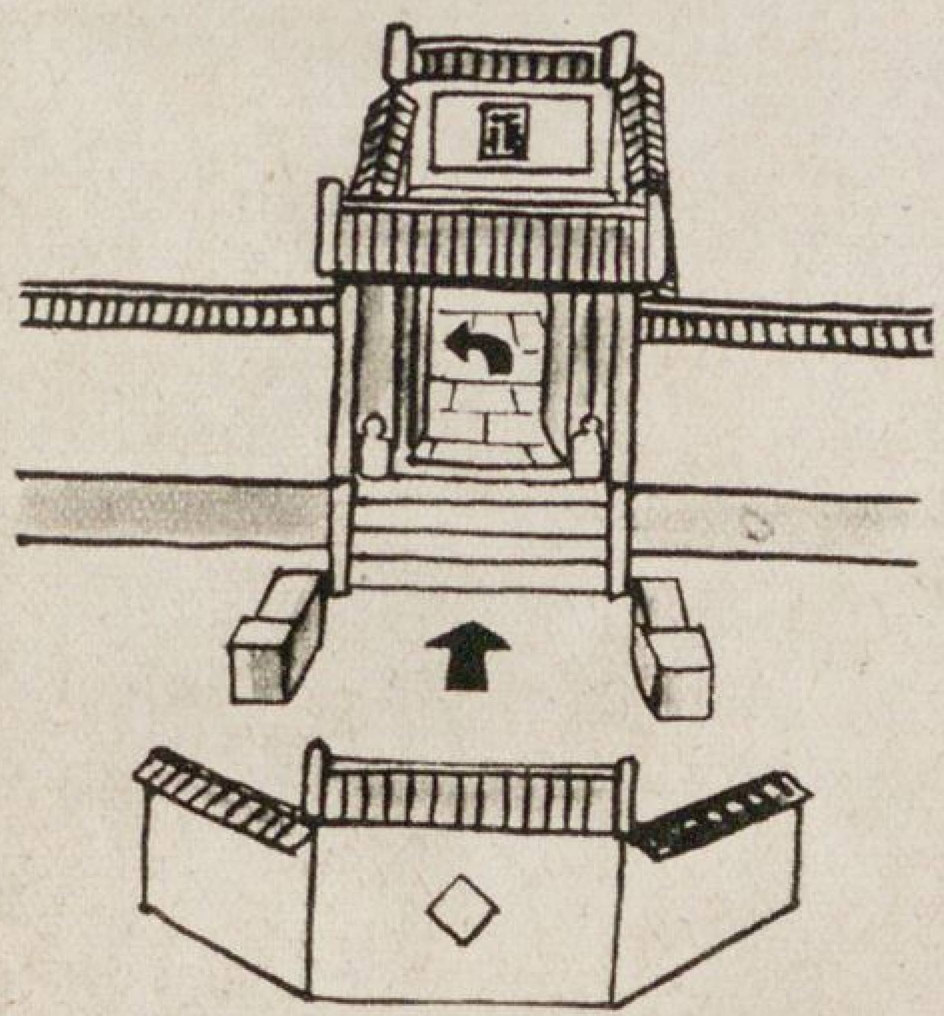


門外の影壁

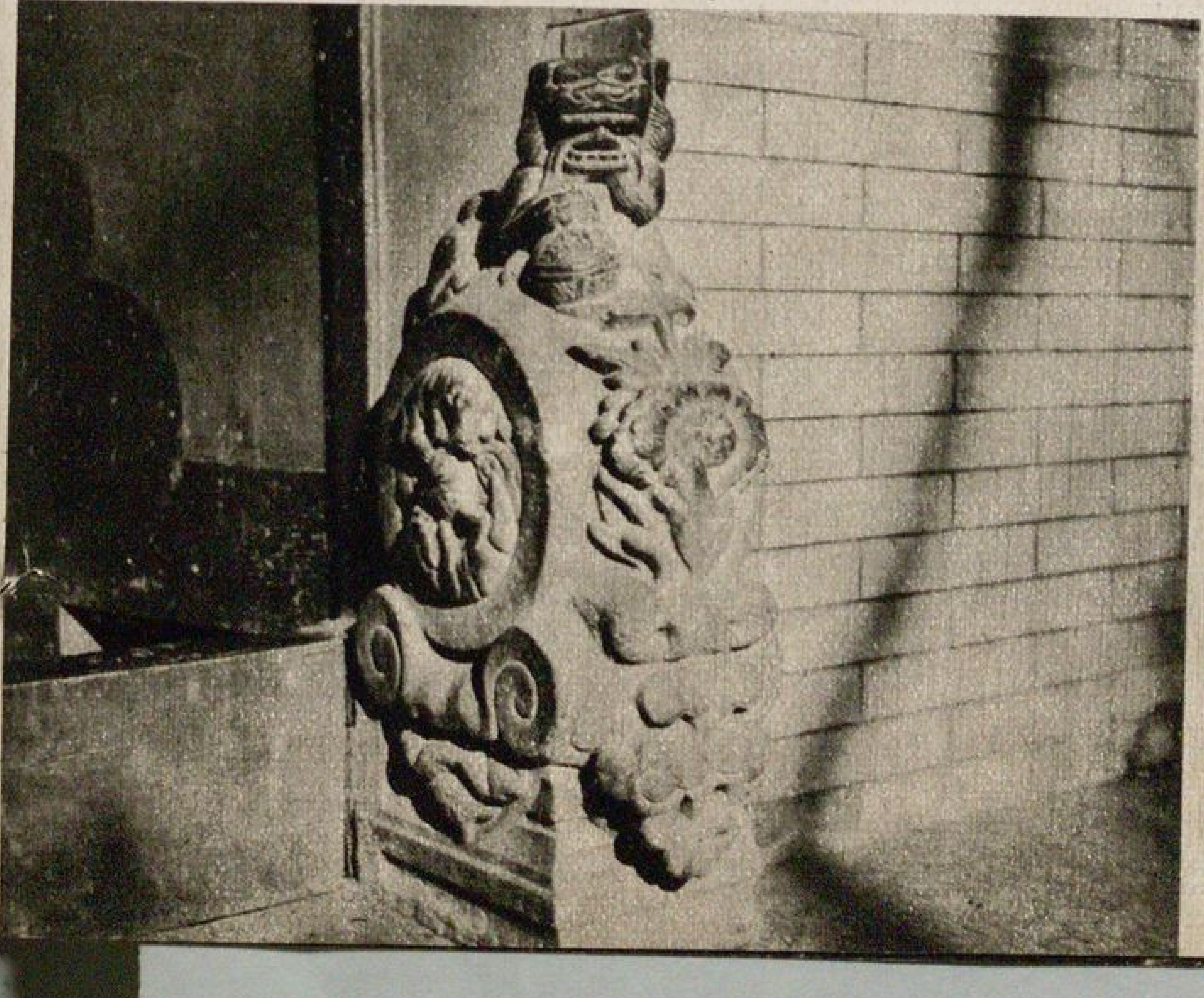
家の入口にある門は普通大門と謂ふが街路に面して居るので街門とも呼んで居る。この大門の兩側に石の踏臺があるのをよく見かけるがこれは上馬石と言つて昔はこれを踏石として馬に乘つたのでこの名がある。三段のと二段のとがあるが三段のは官職を有する家にのみ許された形式で一般民家では二段のを用ひた

門柱の下には普通に高さ一尺乃至二尺位の石の彫刻物がある。これは門枕石と謂ひ太鼓の形をしてゐて、猿、獅子等が彫られて居るのが多い

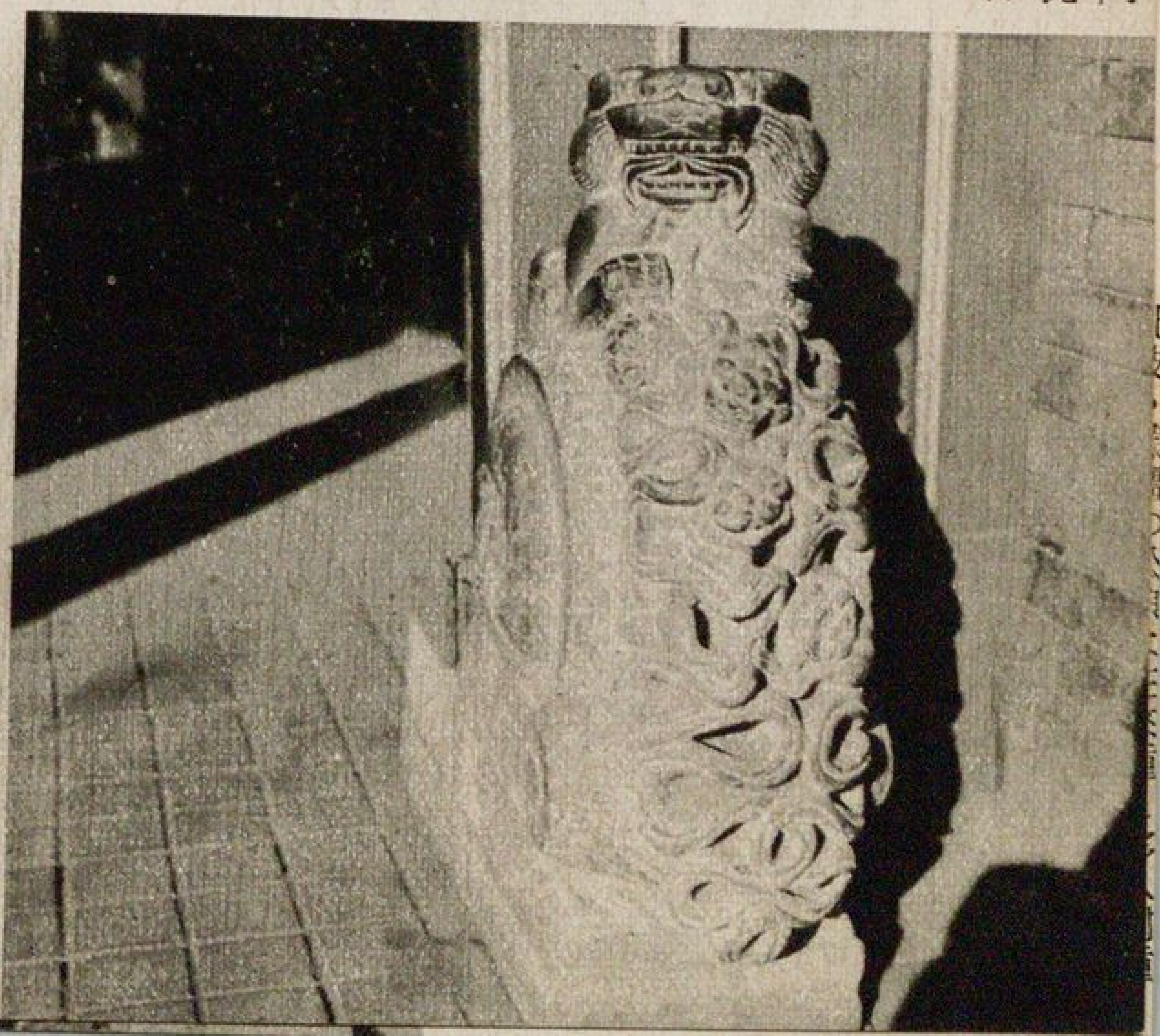
大邸宅では門外に、普通では門內に大門と相對して獨立した壁がある。これは影壁（インピイ）或は照墻（チヤオチヤン）と謂ひ十尺四方位のものから大きいものになると二間四方位のもあり、正面に鴻喜などの緣喜文字が彫られて居る。これは門外から門內を見透かされない爲と、魔除け、方角避けなどを目的とするものである



門枕石



門枕石



門の周圍

Chinese Gateway Constructions.

上馬石




無敵！國産第一位
ムッソリーニペン
スラスラ書けて
錆びず値の廉い
國産逸品！
新生國策イリ
ヂュウム白金ペン付
クラウン万年筆
書きよく
體裁優美
構造堅牢
流線型
北京北海公園
大阪 株式會社 澤井商店

永和號由來

武部英治

萬壽山昆明湖の一隅に永らく世間から顧みられず空しく水中に埋れて居た汽船永和號が、この度國際觀光局の斡旋によつて引き揚げられ再び陽の眼を見ることになつた。權勢一代に並びなかつた西太后を乗せて湖上を走り廻つた華やかな面影は今にかへすよしもないが、それでも昔の裝ひを新にし船首の黄龍の彩色も鮮かに、今にして見れば古風な外輪船ではあるが當時は「最新優美の快游汽船」とうたはれた姿を地上に復活したのである。引き揚げて据付けた場所は萬字墻の東岸上、石舫の北方約五十米の地點である。此の機會に永和號の由來を語つて見よう。

永和號は明治三十七、八年戰役の時清國から我國に寄贈された山東鹽二千萬斤に對する謝禮の意味で日本政府から贈つた返禮品である。鹽は專賣局從つて大藏省の所管であるところから大藏省からその返禮をするために協議の結果、西太后の御乗用に供する快游汽船（ヨツト）を贈呈することに決定し價格拾萬圓を以て川崎造船所に注文したのである。その間、時の公使内田康哉氏、伊集院天津總領事等が色々と盡力された。當時昆明湖には淸國帝室御用船としては既に櫓櫂式のものが五隻と外輪汽船が二隻あつた。此の二隻の小蒸汽は塘沽の北洋造船所で獨逸人の技師によつて作られたものであるが、注文を受けた川崎造船所では日本の新興科學の腕前を見せる好機である、外國製品に負けてはならぬと云ふ譯で大いに張り切つて直ちに阪元技師等の專門家を北京に派遣した。技師は約一ケ月滯在して御用船を見學すると同時に氣候、風俗、習慣に就て調査し大いに愼重を期して歸朝、太后の乗船として相應しい壯麗優美な汽船の設計をしたのであつた。起工は明治四十年七月六日、神戸川崎造船所に於て行はれ、假組立を施工の上一旦解體して翌四十一年二月下旬萬成源丸で神戸港から塘沽に向け發送し、塘沽から鐵道に積み換へ北京に到着した。この時船に付添つて工學博士萬濃貞雄技師が技師一名職工三十名を引連れて來た。持つて來た材料は合計五百九十六個、他に組立材料で愉快なことには職工の食糧二ケ月分迄持參したのである。同年四月下旬には猪木技師が更に職工約二十名を引率して乗り込んだと云ふから相當に大掛りな人數であつた。

組立は萬壽山内の船渠でやり、五月二十日に進水をし、同二十五日には公式の試運轉をやつた。その時機關の一部が破裂したと云ふ事故もあつたらしいが先づ〳〵成績良好だつたので、會社から大藏省に引渡しを終へ、愈〻獻納式を擧行する運びに至つた。時に光緒三十四年華暦四月二十八日、即ち明治四十一年五月二十七日である。萬壽山頤和園は西太后が北洋艦隊建設の資を割いて改修造營されたと傳へられるが、其の園内で曩にその北洋水師を黄海に擊破し次いでバルチツク艦隊を日本海海戰に擊滅した帝國海軍の記念日に、日清國交親善のしるしとして、西太后に御乗船を贈ることになつたのは奇しき因縁と云ふべきである。

さて獻納式當日の情況は仲々盛んなものであつた。

同日阿部臨時代理公使は大河平書記官、館員及び中村、青木二少將、池袋專賣局部長等を隨へ、清國側參列者と萬壽山外務部公所に赴き、會見を行つた。清國側は、軍機大臣醇親王、外務

内容

部尙書那桐、內務府大臣奎俊、繼祿、增崇、外務部聯梁二侍郎其他である。會見後一行は馬車を馳せて河畔繡漪橋に至り、二隻の小蒸汽船に分乘して昆明湖を横切り途中輪船公司で獻納新船を見、龍王島に上陸し、玆に獻納船たる永和號を迎へたのであつた。

そこで獻納式をやつたのであるが阿部代理公使は次の様な祝辭を讀んだ。

「殿下並ニ閣下、帝國政府ヨリ大清國皇太后陛下ニ獻納ノ爲、豫テ當地ニテ製造中ナリシ游船玆ニ竣立ヲ告ケ、本日帝國政府ノ命ヲ奉シ、謹ンテ殿下ニ御引渡ヲ爲スノ任ニ當レルハ本代理公使ニ於テ最モ光榮トスル所ナリ。皇太后陛下ハ本船ニ永和ト御命名セラレタルハ我カ兩國和好ニ對スル深遠ナル叡慮ニ出テタルモノト推察シ奉リ、本代理公使ハ益〻欽感ニ堪ヘス。尙願クハ殿下ヨリ可然御執奏アランコトヲ」

大河平書記官は之を通譯し、之に對して醇親王から謝辭を述べられ、祝通譯が之を譯した。之によつて見ると、本船は西太后躬ら御命名になつたので永く平和を保つと云ふ意味であるとすれば、まことに今日から顧みて意義深いものがある。

式後、一同は記念撮影をして、それから醇親王以下清國側大官と代理公使等は永和號に乘り、其他の隨員は小蒸汽に分乘して昆明湖を渡つた。この時永和號の舷頭には清國旗たる黃龍旗と永和の二字を記した旗と二旒の旗を翩翩と飜へし昆明湖上一層の光彩を添へたのであつた。尙この日は天氣清朗まことに兩國和平の象徵として相應しい絕好の日和であつたとのことである。

一行は下船してから外務部公所と、海軍公所の二ケ所で日清交互に主人側となつて盛宴を張つた。

以上は大體北京大使館所藏の記錄に據つたのであるが、何しろ三十八年前の古いこととて當時の關係者は多く物故され詳しいことは解りかねる。然し當日式に參列された人で健在して居られる方もある。曹汝霖（當時の外務部右丞）、祝惺元（當時の外務部員外郎で醇親王の通譯をされた、現に華北政務委員會政務廳長）、康士鐸（當時の北京日報記者、現に內務總署視察）の諸氏は何れも現在北京で活動して居られ、筆者は過日この三氏から興味ある當時の想ひ出話を聞くことが出來た。

永和號建造當時の構造は大略次の樣であつた。

船體部	
全長	六七呎〇吋
幅（最大）	一四呎八吋
深	四呎〇吋
吃水	二呎三吋
排水量	二二・五五噸
總噸數	二五・九〇噸
機關部	
主罐徑	三呎〇吋
全長	七呎三吋
外車徑	六呎九吋
同回轉數	毎分ニ付七〇
馬力	一八
速力	六節

中央に一本煙突を有する鋼製外車汽船で、船體は前部船艙、客室、機關室後部船艙の四區劃に分たれて居る。船首には清國皇室の紋章黃龍の彫刻を裝飾し、甲板は全部天幕を以て覆つた。客室內には、大阪山中裝飾店特製の玉座、机、椅子等の諸調度品を備付け、床面には絨緞を張り詰め、太后御乘船の名に背かぬ華麗なものであつた。

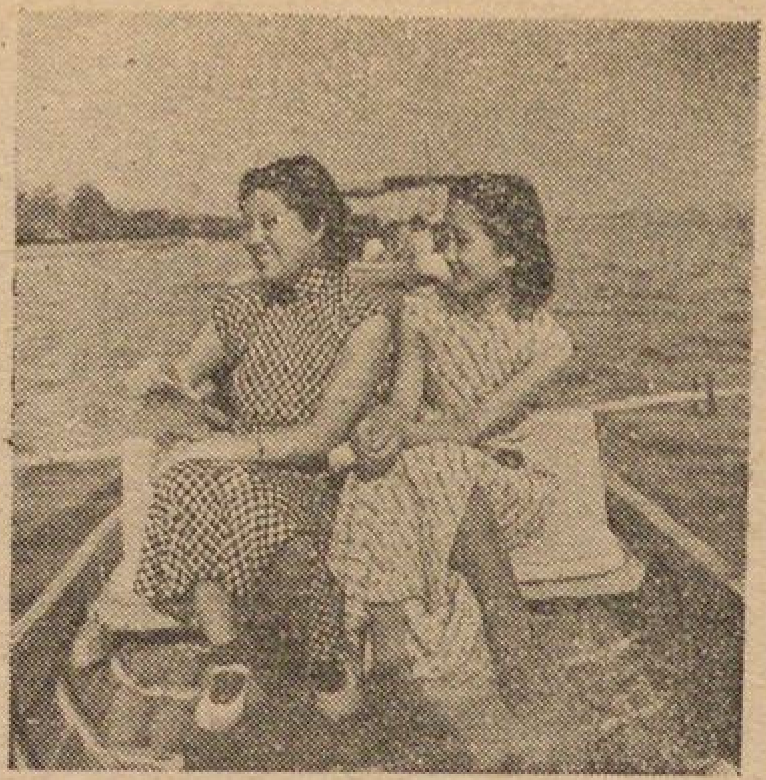
再生した永和號は右のうち、甲板の天幕と客室內の調度品を缺くのみで他は殆ど舊態を備へて居ると見ていゝ。尤も機關は動かさないのだから小さな機械類は散逸した儘になつてゐる。

獻納式が濟んでから數日後、六月二日に西太后は永和號にお乘りになり、此の船は他の二隻の小蒸汽に比べて大きいので特にお喜びになつたさうだから、川崎も大いに面目を施した譯である。其後も太后は妃殿下達を集めて二三度お乘りになつた樣だつたが、惜しいことに、その年の十一月に崩御になつて比較的御愛用の時が短かつた。西太后崩御の後は永和號も自然に忘れられ、民國になつてから三、四年頃までは運賃を取つて昆明湖の遊覽用に使用したこともあつたが、運轉費や修繕費が嵩むので遂にそれも取止めになり、何時の間にか風雨に曝され船體の半ばを水中に沒し今日に至つたのである。

最後に祝惺元氏の述懷を傳へてこの稿を綴りたい。

「今日迄四十年の間、中日の友好關係は永和號獻納の當時が最も密接な親善時代であつた。民國成立後永和號が遂に沈沒したと聽いたが、同時に中日關係は日を趁うて惡化し、種々不幸の事件が發生し激成して空前未曾有の事變とまでなつた。今幸ひに國交が調整され、之に因つて永和號も沈み隱れて居たのが復、世に現れて來た。之は必ずや、全面的和平が實現すると云ふ鐵證であらう。まことに不思議な因緣である。此に於て余は永和號の復活を賀するのみならず、兩國永遠の和平成立を心から賀する次第である。」

（筆者は鐵道省國際觀光局北京辦事處長）



萬壽山昆明湖にて

北京の小姐

高木健夫

北京、とわざわざ斷らなくてもいいくらゐ、小姐といふことばは、なんと北京的ではあるまいか。

ぼくは小姐といふことばが第一に好きである、（もちろん、小姐そのものが好きでないことは絶對にないのだが、なによりもまづそのことばが好きであるゝ）日本の姐御、といふときの姐といふ字が、小姐となると、妙に可憐な、楚々たる字感と音感を與へるから妙なものである。

この字の感じだけは、毛唐にはわかるまい。ざまあみろ、だ。同文ならぬ同文のウレシイところがここにあり突で、漢字を使ふ日本人のみが感じ得る文字のうへの親しみである。

この、ゲにもいみじき文字のうへの共感を、ちかごろの日本の文人らは等閑に附してゐる。たとへば、林語堂のモメント・イン・ペキンの邦譯に「小姉」と譯して、シヤオチエなどとルビを振つてゐるごとき、言語道斷なるノンセンスの横行…ま、憎まれ口はよさう。

ところで、序論ついでに、小姐そのものに對する憎まれ口をひとつだけ叩かせて貰ふと、彼女らは、どうも上海的雰圍氣に憧れ、それを發散したがる癖があつていけない。どだい上海文化なんてものは、エスプリのない成り上がり文化にすぎないのであるが、その文化の後塵を、王城の地に拜して得々としてゐる小姐をみると、惚れた女が面憎い男のとこへ嫁に行つたやうな腹立たしさが先にたつてならぬ。

上海文化のインチキ野郎を、北京小姐の心臓のまはりから追つ拂はぬことにや、どもならん。

そこへゆくと、日本的敎養を身につけた小姐はすばらしきかな、だ。

★

昔ばなしになつて恐縮であるが、いまはさる銀行家の夫人で、四人か五人の子持ちであるが、僕が彼女に初對面の時は、たしか十九か廿歳、京都の同志社を出て、清水安三氏の崇貞學園で教鞭をとつてゐた――侯なんとか女士といへる小姐。

そのころの北京小姐といへば、申し合せたやうに緣なし眼鏡をかけて（それはこのごろの色眼鏡の流行に匹敵するといつてもいい程だ、近眼も然らざるものも、みんな、といつてもいい位眼鏡をかけてゐた）黑い絹のスカートを穿いて、（そのスカートが、まことにふはり、と布の幅をふんだんに使ひすぎてゐて、箍をはめたら、そのまま南北戰爭時代の淑女のコステユームが出來上がらうといふ代物だ）短い上着を着てゐた。

そのころ、さうしたいでたちの小姐たちは、さかんに中央公園の古柏の下を泳いでゐたものだ。

ぼくたちは「支那金魚」と稱してこの風景を眺めてゐた。ゲにもイミじき支那金魚や！　中央公園のあの金魚のカメを覗いて見給へ。そこには、黑い尾鰭をゆらゆらさせ、赤黑まだらの胸を張り、いまにもこぼれ落ちさうなでつかい眼玉をピカピカさせて、金魚たちは泳いでゐるではないか。

中央公園、
ああ、カメのなかに金魚は歩み、
ああ、古柏の下に小姐は泳ぐ。

……とか、なんとかいつて、ぼくたちは、籐椅子に香片を啜り、あははははといつて瓜子兒を吐きだした。

★

侯さんは、しかし、「支那金魚」のなかではじつに優秀な金魚であつた。

第一、美しかつた、第二、しとやかであつた、第三、日本語をしやべつた、第四、未婚であつた（いや、戀人がなかつた、といひ直すべきであらう）。

しかし、困つたことに、同志社の出身であり、崇貞學園の先生である彼女は、必然敬虔なるクリスチヤンであり無信仰者の僕を、當時、ぼくが寄寓してゐたY太太と一緒になつて、なんとかしてキリスト様の有難味を知らせようと努力しはじめたのである。

ある日、僕がY家のピアノをポンポコポンと人差指で叩きながら、懸命に佐渡おけさのメロデイを鍵盤のうへに模索してゐた時、たうとう小姐にとつての僕に對するチヤンスが到來した。

『だめよ、そんなピアノ、ピアノはかうして彈くものよ』

彼女は、あまり上手ではないが、本格的にポンポンとやりだした、そしてうたひはじめた。

僕はうつとりと眺めてゐた。

〽うまがないてめがさめて……

『その唄なに？　童謠？』

といふと、彼女は、鍵盤のうへへ、ボロロン、とうつ伏せになつて、あははとわらひだした。

『これさんびかぢやないの。おバカさんねえ』

そして、彼女は、この『うまがないて』をなん度も、何度も彈いた。つまりメロデイから、ぼくをキリストの道へひつぱりこまうといふ算段だつたらしい。

ぼくは、さんびかはとにかく彼女の美しい唄聲に聽き惚れることしばし、やがて、そこへ、漢學の素養を以て聽える漢字紙順天時報の寄稿家O氏が、闖入して來た。そして大聲で呶鳴りつけた。

『こら、君たちは吾輩をブジョクするのかツ！』

ぼくはなんのことか、わからなかつた。ぼんやりしてゐる耳へ、つゞく第二彈！

『そんな歌やめ給へ。なんだ、失敬な！』

そして、O氏はさつさと足音あらく出て行つてしまつた。

侯女士は、とみると、しばらくぼんやりしてゐたが、たちまち、あははとわらひ出した。ピアノの鍵盤のうへへうつ伏せになつたので、またボロロンとピアノが鳴つた。

『何がをかしいんです？』

『をかしいぢやないの』

『をかしいことはをかしいが、笑ひたい程でもないぢやないか』

『あら、あなたは笑ひたくないの？　こんなをかしいことが……』

彼女は、また腹をよぢらせてわらつた。

しばらくして、彼女は

『まだおわかりにならない？』

といふ。まだわからない、といふと

『あの方は、ご自分のことをヒヤかしてると思つてお怒りになつたのよ』

といつた。

とたんに、ぼくもをかしくなつて、あ、は、は、とわらつた。O氏はなんと長き馬面であつたのである。

それを隣室にゐて『うまがないて……』と唄はれ、若い男女が笑ひ合つてゐたのだから、O氏たるもの、アニ、それ、フンガイせざるを得んや、である。

結局、さんびかによる僕の求道も、これでおじやんになつた。

ある日曜日、應接間へ入つてゆくとY太太と侯小姐が、深刻な顔をして、お祈りをしてゐた。

それをみると、ぼくは急にをかしくなつて來た。卓のうへにはお菓子がおいてあり、お菓子は、このふたりの女性のお祈りによつて、ひどく手持無沙汰のかたちでポツンと在り、二人の女性はなんとなくおあづけを喰つてゐるやうな形だつたからである。

あ・は・は・は……とうつかりわらつてしまつた。

その日以後、ぼくは侯小姐に會はない。つまりY太太から勘當を喰つたわけで、この背德青年は、Y家から、かの馬面の漢學者O氏宅へ、轉居をさせられたからである。

★

それから間もなくだ、あの脚の曲線がヂカに見える旗袍の流行が、北京小姐の風俗を侵略しはじめたのは……。

たぶん南京路あたりをしやなりしやなりと歩く野鷄が、職業上の必要から着はじめたものが、フランス租界あたりの摩登小姐に傳染し、天津、北京と北伐して來たものにちがひあるまい。

しかし、旗袍は、あの黑い裳服の裾

のやうなスカートに較べるとたしかにスマートである。つまり、時髦である。

事變後、僕が知り合つた小姐に于さんといふ女性があつた。

ひどく亞歐的な顔立ちの小姐で、眼のあたりはミロのヴイナスにそつくりだし、唇はモナ・リザのやうに、いつもわらつてるやうな、人を小馬鹿にしたやうな……そんな顔だちであつた。

友人とふたり、事變後の大陸ラツシユのひとびとにはさまつて、三度めの北京居留のためにやつて來る船中、ちやうど舟山列島の沖合ひでぼくたちは知り合ひになつた。

彼女は上海の叔父の家からの歸りとかで、妹と一緒にこのD・D・Kの客となつてゐたことが、久しぶりの北京話のトレーニングに、と話しかけてみてわかつた。

デツキは、彼女ら姉妹を中心にしていつのまにか日本の青年たちが集るやうになつた。船室から北京會話書をとり出して來て、無料で手ほどきを受けようといふ勇士も、二三人たちまじるかと思へば、この姉妹、歌が大好きだとあつて、なんとか曲集をもちだして來て合唱しようとする選手もあつて、なかなかに賑やかな船旅であつた。

さういふ華やかな座にあつても、彼女はひどく淋しさうに見えた。そして船べりによりかゝつては、青い顔をして、漁光曲をうたひ、さうして、モナ・リザ的ゑくぼに、人を小馬鹿にしたやうな、自分自身までを馬鹿にしたやうな笑ひの陰影をみせるのである。

さうして北京へ着いた。

着いて一ケ月、ふと胡同で于女士の妹の方に會つた。胡同といつてもいろいろござんす、であるが、なんと彼女の家とぼくの社宅とは同じ胡同の、しかも、壁ひとつ隔てた隣人同士であることがわかつた。

なーんだ、といふわけで、ソコハカとなき交情がつゞいた。

社宅の青年たちも、さかんに于女士めがけて友愛の手(?)をのばした。やれ一緒に散歩した、とか、中國話の先生にたのんだとか、電影兒を看に行つたとか、いやはや賑やかなことだつたが、そのうちに、ぱたりと彼女の噂がなくなつた。

やがて、ある一日、彼女は僕をたづねて來て、

『結婚しますの』といつた。

『誰が？　誰と？』

『あたしが、あたしの好きな青年と』

その好きな青年、といふのが、中國青年であつたことは、社宅の青年隊をしてがつかりさせたが、またそれが當然でもある、といふ民族と民族との垣をも意識させたやうであつた。

去年の夏はひどい大雨であつた。

そのある雨の夜中、ぼくは隣りにはげしい赤ん坊の泣き聲を聽いた。幻聽かとはじめは思つたのだが、激しい風雨の音をつんざくやうに、ひびいて來るのはたしかに赤ん坊の泣き聲であつた。そのうちに、ぐわおーん！　とすさまじい地ひびきがした。塀が雨のために崩れたな、とおもつてゐるうちにいつのまにか眠入つてしまつた。

——翌朝。

果して隣家との塀はくづれてゐた。そして、崩れた塀の院子を透して、棗の木のある玻璃窓に、女の髮をなほすシユミーズ一枚の姿が見え、そして、そばで赤ん坊が泣いてゐた。

あツ、と僕はおもつた、于女士だ。

『于さん、お早う、いつ歸つた？』

くづれた塀越しに呼びかけると

『ゆうべ。夫は共産黨員でしたの。あたし知らなかつたわ。ゆうべ、警察へ連れて行かれましたの』

彼女はガラス越しに、人を小馬鹿にしたやうな笑ひ顔をしてみせた。もはや小姐ではない笑ひ顔を——。

（筆者は東亞新報社主筆）

北支の農諺（續）

みづの・かほる

35、早穀、晩麥、十年九壞
十年に一度か當らぬ作は
晩生の麥に早生の粟
×作物の蒔き方を注意したもの

36、穀要稀麥要稠、芝蔴地裏臥下牛
粟は薄蒔き麥厚蒔きに
胡蔴思ひきり粗く蒔こ

37、横擺芋頭、堅擺葱
植ゑる里芋眞横に寢せて
植ゑる葱苗眞つ直ぐに

38、黄豆要得密、高粱要得稀
大豆は少し厚めに蒔いて
高粱薄めに蒔くがよい

39、深了酥了、淺了飄了
覆土深けりや種が腐るし
さりとて淺けりや風に飛ぶ
×養畜禽に關するもの

40、想吃蛋、糗食換
餌もやらんで卵を産めと
鷄に求めるむしのよさ

41、養猪不如養羊、養羊不如養塘
豚より羊、羊より養魚
魚は飼へるよ水だけで

42、驢年馬月猪百天
飼へば肥えるよ豚百日に
驢馬は一年馬は月

43、母牛養小牛、三年五個頭
親牛一匹仔に仔を産んで
三年五匹の頭數
×植樹の必要を訓へたもの

44、栽桑黠桐、子孫不窮
桑と桐の木必ず植ゑろ
幸は子孫の代にまで

45、家有千根楊、不用打柴郎
家に千本柳を植ゑりや
木樵男の手も要らぬ
×樹木の好む土質地性を訓へたもの

46、旱棗澇栗子、不旱不澇收柿子
ひでりに棗水には栗よ
水もひでりも弱い柿

47、沙裏青楊、泥裏柳
砂地にどろのき濕地に柳
性にかなつた地を選べ
×果樹の結果樹齢を訓へたもの

48、桃三李四梨五年、棗樹栽上當年錢
桃三李四梨五年目に
棗はその年實を結ぶ
×副業の必要を訓へたもの

49、墻邊地角好栽桑、積來兒女縫衣裳
垣の隅々桑の木植ゑて
積んだ小金で子に着せろ

50、若要富、男耕田女織布
富をつくろなら男は畑に
女はうちではた織りを

51、若要發、外邊兒生意內莊稼
富を積もなら行商やつて
家は百姓で立てて行け
×害蟲驅除の方法を訓へたもの

52、春殺一蟲、勝於夏殺百蟲
春に殺した蟲一匹は
夏の百匹にも尙まさる
×好ましき年柄を訓へたもの

53、麥收三月雨
春の三月うるほひあれば
麥は豐年あたり年

54、黑夜下雨白日晴、打的糧沒處盛
夜雨晝晴れ順よい天氣
五穀豐かに實に熟れる

55、春旱不算旱、六月連雨吃飽飯
春の旱りは心配するな
六月雨ありや年はよい

56、伏天大雨、年頭保十成
土用雨あり五穀も伸んで
今年や豐年あたり年
×好ましからざる年柄を訓へたもの

57、春旱不算旱、秋旱減一半
春のひでりはまだこと易い
怖い旱りは秋ひでり

58、春雨溢了壠、麥子扁豆去了種
春の大雨畦越す雨は
麥も大豆も大不作

59、芒種無雨、空種田
芒種節來てうるほひ無けりや
ものの蒔付け間に合はぬ

60、六月不熱、五穀不結
暑い六月ありやこそ秋は
五穀房々實に結ぶ
×行事を訓へたもの

61、山青葫蘆、地青瓜
山が青めば瓢簞蒔こよ
野邊が青めば瓜蒔こよ

62、清明一到、農夫起跳
またも來たぞえ清明節が
百姓ぼつ〳〵野良始め

63、清明高粱、穀雨穀
清明節には高粱蒔いて
穀雨の節には粟を蒔き

64、棗芽發、種棉花
棗が青い芽をふき初めりや
棉の種蒔き忙がしい

65、到小滿遍開鏟
來たよ小滿芽に芽も揃うた
村は總出で草とりに

66、夏至起蒜頭
夏至が來たかや日足の早さ

前の蒜畑もう採れる

67、七月胡桃八月梨、九月柿子來趕集
胡桃七月梨や八月よ
九月眞つ赤な柿が出る

68、頭伏蘿蔔、二伏菜、三伏種蕎麥
初伏は大根、中伏白菜
三伏最後に蕎麥を蒔け

69、棗紅肚、磨鎌割穀
棗の腹が眞つ赤に熟れりや
明日は粟刈り鎌を磨げ

70、麥黃種糜、糜黃種麥
麥が熟れたらその次や黍を
黍が熟れたら麥蒔こよ

71、立冬不拔菜、一定受霜害
立冬來たぞえ白菜拔こよ
立冬過ぎたら霜が來る

72、花見四十日
五穀果菜の實になるものは
花見て四十日實に熟れる

73、清明早立夏遲、穀雨棉花正當時
清明にや早いし立夏にや遲い
棉を蒔こなら穀雨節

74、小暑去土葉、初伏打花頭
小暑の節には土葉を採ろよ
土用に入つたら蕊を摘も

×時節を訓へたもの

75、清明斷雪不斷雪
降るも降らぬもおほよそ雪は
清明前後が末の雪

76、大旱不過五月十三
春のひでりが續かうとても
五月十三日越えやせぬ

77、冷在三九、熱在三伏
冬の寒さは三九の寒さ
夏の暑さは土用中

78、七月十五定旱澇、八月十五定收成
水もひでりも七月十五
八月十五にや穗に稔る

79、進了十月中、梳頭洗臉工
十月這入れば日が短くて
髮を結ふ間もありやしない

×氣象に關するもの

80、夜晴無好天
夜晴れの天氣あてにはするな
明日はしぐれる雨になる

81、風是雨的頭
風は雨の子風吹きや後は
雨か曇りかしぐれるか

82、曇天雨露水
天氣變るかしぐれてくるか
庭の小草にや露も無い

83、月暈而風、礎潤而雨
月が傘さしや明日あ風が出る
土臺濕れば雨になる

84、南虹北虹發大水
南と北とに出る虹は怖い
雨も大雨大出水

85、三伏天要熱、三九天必冷
燒けつくやうな土用に遇へば
今年やきびしい冬が來る

86、紅雲日出生、勸君莫遠行
旅に出るならあしたに延ばせ
今日は朝燒雨になる

87、春天勒馬等乾路
春の小雨はすぐやんで乾く
馬を繫いで休む間に

88、臘七臘八凍吊下八
師走七八日の寒さと來たら
顎も凍つて落ちるよな

89、春天看人不看水
水はまだ〱つめたいけれど
春は來たぞえ衣裳見やれ

×雪は豐年の兆なりと訓へたもの

90、冬雪寶、春雪草
冬に降る雪や寶の雪よ
春に積む雪草の雪

91、臘月三白定豐年
師走に三度の大雪降れば
翌年や百姓のあたり年

92、大雪兆豐年
雪よ降れ〱大雪降れば
今年やうれしや作はよい

…………

さて、讀者よ、かうして書き並べて見ると限りがない。このあたりで、一と先づ北支の農諺は打ち切ることとしよう。

（筆者は華北交通資業局參與）

鄭板橋

一氏義良

（一）

筆者は鄭板橋がそんなに好きではない。といつて決して嫌ひでもない。率直で、情熱的なところはたいへん好きだ。しかしもつと自省と思索とが欲しい。あれだけでは崇拝すべき人間としては物足りない。生活の深さと學問の深さとが、もつとあつて欲しい。

しかし、かれの詩や畫や書を見るとひねくれてはゐるが、私心や惡意の伴はない愛すべき稚氣と、若干の安つぽいヒューマニズムとに、ほゝ笑ましくなる。心の中に融けあつて、お互に同じ凡人としての抱擁を感ずる。おしまひには、はら〳〵と私の眼から涙さへ落ちる。一茶や白樂天と同じ人間的センチメンタリズムが共鳴させるのであらう。

（二）

鄭燮、字は克柔、號は板橋、揚州興化の人。興化は、江蘇省の中部にある鎭江對岸の古都楊州（江都）から大運河に沿つて北へ、高郵まで行つて、更に東へ數里、湖河の多いこのあたりでの、相當な都邑である。康熙三十二年の生れ、今から約二百五十年前である。日本では元祿六年。支那でも日本でも世の中が最もよかつた頃である。畫家としては、高鳳翰より十一歳、金農心より七歳若い。乾隆元年の進士だ。四十四歳の時である。死んだのは乾隆三十年で、七十三歳。進士になつて間もなく、山東省で范縣、更に濰縣の知縣となつた。のち病を以て故鄕に歸り、再び世に出でなかつた。官をやめたについては、病の故でなく、知縣の時、飢饉に際し、救民のため法に拘らずして賑恵を施したので、上司のため咎められ、罷めて歸つたとの傳がある。大鹽中齋と同じ、板橋にありさうな逸事である。人となり、疏宕灑脫、また慷慨嘯傲、流輩に超越したとも傳へる。詩詞にたくみで、白香山、陸放翁に近く、鄭虔三絶の目ありとされた。詩よりも詞がすぐれ、弔古慷慨の趣ある。書にも長じた。隷、楷、行の三體を相まじへて別致を出し、古秀獨絶、天下比のない逸氣をあらはした。畫は特に



鄭板橋作

蘭竹を作るを好み、草體の竪長撇法を以てし、運らすに多くは亂れず、少しの疎脱なく、意に随つて揮灑し、ことごとく時習を離れ、蒼勁絶倫の風格があつた。要するに鄭板橋は詩、書、畫共にすぐれ、しかも獨特で、よく孤高激情の眞骨頂をそのまゝ露出した。

（三）

鄭板橋の面目を最も如實に傳へる自編自刊の「鄭板橋全集」六編がある。第一編は古今體詩で一百八十八首、第二編も古今體詩で一百五十一首、第三編は詞七十七首、第四編は道情十首、第五編は題畫六十五則、第六編は家書十六通を輯めてある。今は原刻のまゝによつた石印刷(民國二十年)もある。この全集は板橋晩年に生前の所販で、はじめに前刻詩序、後刻詩序がある。前刻序は「余の詩格は卑々である。七律は尤も放翁の習氣が多い。二三の知己はこの病を訴る。好事者また余に梓に付さんことを促すので云々」後刻序は「古人は文章を以て經世とするが、吾輩の爲る所は風月花酒のみ。……一騷壇の詞客、何ぞ社稷生民の計に與らんや。……しばしば平生吟弄するところを燒き直さうと欲したが、棄てるに忍びない云々」といふやうな、自己辯解と自負心とをかねた文句である。つぎに紫瓊蜓道人愼王郡題詞がある。愼郡王には特別の寵を蒙つてゐた。

（四）

詩鈔中の「七歌」は、かれの自叙傳と同時に面目を躍如たらしめる。

「鄭、生れて三十一の營みなし、書生學び劍を學んでみな成らず。市樓に酒を飲み年少を拉す。終日、鼓を撃ち竽笙を吹く。今年父歿して遺書を賣る。剩卷殘編あれど看て快からず。甕下荒凉、薪の絶えたるを告げ、門前剝啄、來つて債を催す。鳴呼、一たび歌へば兮、歌は偏側す。皇遽として書を讀めば讀めども得ず。我れ、生れて三歳、我が母なし。叮嚀、劬き難し襁中の孤。牀に登り乳を索め、母を抱いて臥す。母の歿したるを知らず、また相呼ぶ。兒、昔夜啼き、啼いて已まず、阿母病を扶けて啼くに随つて起き、婉轉咽んで撫で、兒を熟眠せしむ。燈昏く母は咳す、寒窗の裏。鳴呼二たび歌へば兮、夜半ばならんと欲す。鴉棲、穩かならず、庭槐斷つ。端なくも涕泗して蘭干に横はる。我が後母を思へば心悲酸たり。十載家を持し辛苦足り。我れをして饑寒を憂ひさらしむ。時には一升、半升の米を缺ぎ、兒は飯の少きを怒つて相觸牴し、地に伏し啼き叫ん面垢汗すれば、母は衣衫を取つて爲めに湔洗せり。鳴呼三たび歌へば兮、歌傍徨たり、北風獵々として我が裘を吹く。叔あり、叔あり、偏に姪を愛す。短を護り、長を論ひて潛に覆ひ匿す。書を倦み、業を逃げ、事として無き無し。藏懷負背、趨つて逸す。布衾單薄、空槖の如し、敗絮零星、兼ねて惡に臥す。濕に就き、乾に移り、叔は夜醒む。鳴呼、四たび歌へば兮、風蕭々たり、一天の寒風、鷄の號くを聞く。幾年落拓、江海に向へば、謀事十事九事殆し、長嘯一聲す沽酒の樓人に背き獨り自ら眞寄を問へば、枯蓬吹き斷えて久しく根なし。郷心未だ盡きず、田園を思ふ。千里、家に還つて、別れば反つて怯。門を入つて忸怩たり、妻、言なし。鳴呼、五たび歌へば兮、頭髮豎す。丈夫の意氣閨房に沮まる。我れは二女とまた一兒とを生めり。寒くして絮絡なく、饑ゑて糜なし。啼號、怒に觸るれば鞭朴を事とす。心憐れに、手軟かにして翻つて悲しみを成す。蕭々たる夜雨、階阤に盈ち、空床破帳、秋水寒し。清晨、那に得たるや、餅餌を持つ。誘ふに貪眠を以てし、早起を罷む。鳴呼、眼前の兒女兮、爺を呼ぶを休む。六歌未だ闋ぢず、家を離れんと思ふ。種園先生は是れ吾が師。竹樓、相峯文字奇なり。十載、郷園に共に遊憩す。壯心磊落、爲さざるなし。二子家を辭して筆墨を弄す。片語、人を干し、氣まづ塞がる。先生、貧病にして老いて兒なし。門を閉して偃臥す相陰の北。鳴呼、七たび歌へば兮、縱横に浩がる。靑天萬古、つひに無情。

（五）

もう一つ、かれの面目を躍如たらしめる乳母詩がある。

原序。乳母費氏は先祖母蔡太孺人の侍婢であつた。燮四歳にして母を失ひ費氏に育てらる。時に歳の飢に値ひ、自ら外で食し、内で勞に服した。毎晨起きて燮を負ひ、市中に入つて一錢を以て一餅を市ひ、燮の手に置きしかるのちに他事を治めた。まゝ魚飧、瓜菓あれば、必ず先づ燮に食

はしめ、しかるのち夫妻子女で食つた。數年にして、費ます〳〵支へずその夫、謀つて去らしめた。乳母敢て言はず、長く涙痕を帶び、太孺人の舊衣を取つて濺洗補綴し、水を汲み、缸に盈たし、また薪數十束を買ひ竈下に積み、數日ならずしてつひに去つた。燮は晨にその室に入れば空々然、破牀敗几の縱橫なるを見た。竈を視ると、猶ほ温かみあつて、飯一盞、菜一盂を釜內に藏れてあつた。いつも燮に飼はせたものである。燮は痛哭してつひにまた食ふ能はなかつた。のち三年、再び歸り來つて太孺人に侍し、燮を撫することます〳〵あつかつた。また三十四年で卒した。時七十有六。歸り來つた翌年、その子俊は操江の提塘官となり、迎へて養はうとしたが、つひに去らなかつた。太孺人と燮とゐるためである。されば燮が進士となると喜んで曰く「吾が撫せる幼主、名を成せり、兒子の八品官となるも、何をか恨みん」と。つひに疾なくて終つた。

平生、負ふところの恩、ひとつ一乳母のみならんや。長く恨む富貴の遲きことを、遂に慚恧を久しからしむ。黃泉の路は迂濶なり。白髮、人は老いて醜し、食祿千萬鍾も餅の手に在るに如かず。

（六）

鄭板橋が濰縣の知縣であつたことは一般に知られるが全集では范縣に關するものが多い。第一編に「紫瓊崖主人板橋鄭燮の范縣令となるを送る。——萬文才華の繡も銅章の新たなるに如かず」等々あり、第二編に「范縣——四五十の家、負郭の尼、落花廳事　浮く塵なく云々」の詩「范縣詩——十畝、褱を種ゑ、五畝、梨を種う云々」の十首がある。「范縣城東樓に登る」の詩もある。濰縣に關するものでは、「濰縣に惱む——青山を行き盡せば是れ濰縣、濰縣を過完すればまた青山、宰官扛げて負ふ詩情性、林密を指顧の間に得ず」また全集中の「板橋題畫」に「濰縣署中、竹を畫いて年伯包大中丞に呈す」とあり、そのつぎに「予歸里を告げて竹を畫き、濰縣の紳士民に別る——烏紗擲ち去つて官と爲らず、囊橐蕭々兩袖寒し、寫し取る一枝清瘦の竹、秋風江上漁竿と作さん。」

（七）

板橋には非常にかはいがつた弟の五橋があつた「舍弟を懷ふの墨」によくそれが出てゐる。それによると「わが年四十二、わが弟の年十八」とある。親子のちがひがあつた。無論、異母弟であつた。第六編の家書十六は舍弟に與へた書で、これによつて、板橋の生涯の半面が最もよくわかる。雍正十年杭州から發信したものに始まり、ついで焦山僧寺からの書幾通かがある。その頃、放浪しながら勉學してゐたらしい、雍正十三年の二通もある。その翌乾隆元年進士に登第し、ついで任に山東に赴いた。途中、淮安の舟中から出した書もある。范縣署中からの信書は五通あつて、その一つに乾隆九年の日附がある。更に濰縣署中からのもの三通あり、その一つに、「余五十二歲（乾隆十年）で、始めて一子を得た」とある。その兒を弟の家に預けてあつたらしく育兒意見を書いてゐる。「平生、最も喜ばざるは籠中に鳥を養ふことである。我れ娛しめど、彼れ囚牢にあり、何の情、何の理、吾が性に通ぜん。また蜻蜓を糸で繫ぎ小兒の玩具となすは一時的に拉して殺すもので、天地の道にそむき萬物の性に悖る。必ず兒にこんなものを與へてくれるな」との意見である。これら家書集の自題は乾隆十四年だから、その時は既に故鄕に歸つてゐたであらう。そして題畫の編には「乾隆二十一年云々」とあるから、全集出版はそれよりのちである。題畫には「乾隆二十一年二月三日、予、一集を作り、八人を會す、程綿莊、黃瘿瓢自分の三老人、李蘊邦、王夢樓（文治）干文濰等五少年、のち朱文震も加はつて九人で九畹蘭花をかいた」とある。當時の交友の情がわかる。また高鳳翰圖牧山（石濤の門下）李鱓、傅雯、邊壽民、金多心など二十一交友につき品評詩を作つてゐる。また石濤と八大山人と自分との蘭竹畫を比較批評した面白い題畫がある。「八大山人の名は天下に滿ち、石濤の名はわが楊州を出でざるは何ぞや。八大は純に減筆を用ひ石濤は微茸のみ、且つ八大は二つの名なく人に記憶し易いが、石濤は弘濟、清湘、道人、苦瓜和尚、大滌子、瞎尊者など別號甚だ多く、まぎらはしい」「八大はたゞこれ八大、板橋もまたたゞこれ板橋」などと氣焰を吐いてゐる。

板橋の逸話などで書きたいことは多い、又書と畫との遺蹟についても書きたいがこゝには省いた。

（筆者は華北交通資業局囑託）

電影年代記

北京のアメリカ映畫

長野賢

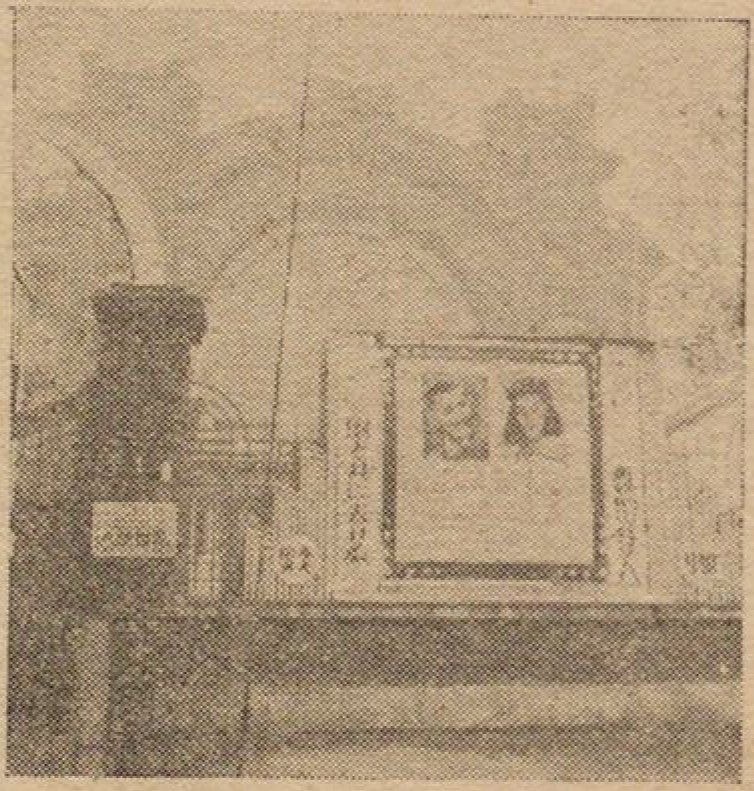
滿洲事變のその昔から北京の電影迷だつた筆者は機會があつたら燕都の電影春秋をものしたいと思つてゐた。けれどこれは史實を漁つての論文でも何でもない、いはばたのしいなぐり書きの類である。それを斷る所以はアプトン・シンクレアならずとも宣傳であらうと曲解の虞れがある。

北京には今洋畫の封切館が三つと中國映畫館が六、七軒、日本映畫館が三軒、その中まだ增えるであらうが、誠に盛んなものである。此の調子で行くと唱戲が食はれてしまひさうである。

僅々二十年餘りのその間に、映畫藝術そのものの發展に伴つてとは言へ、これは、餘りに急テムポな變遷ではある。嘘ではない、電影院が古めかしい北京の一角に出現したのは民國八年末であつたと物の本に書いてある。東安市場の丹桂茶園がそれでである。民國九年初夏の市場大火に燒け出され、東安門大街匯豐軒跡に當時としては珍しい近代建築を現はしたのが今の眞光電影院である。新築竣工のそれまで暫く中央公園中山堂で假營業してゐて、入園料共、五角で電影を見せたと古老の話だ。

「建築の窳敗座位の狹少秩序の凌亂痰涎の交唾空氣の混濁光線の黑暗手巾の飛舞煙火の繚繞茶役小販の雜沓怪聲拍掌の喧鬧人をして苦惱黑暗地獄に入るを感ぜしむ……中略……茲を以て高尚の娛樂を提倡し以て國民の公德を增進し、公衆の金錢を以て公益の事業を擧行せん事を目的とす、云々」

これが民國十年十一月五日眞光電影劇場新院設立の際の宣言である。當時の模樣が判つて面白い。火・水・金・日の一週四回映畫取替へで、入場料は階下五角階上八角包廂一元、開演は一日二回午後三時と九時であつた。男女同額、十五歲以下の子供には單獨入場を許さずと斷り書があつたのも隔世の感がするではないか。



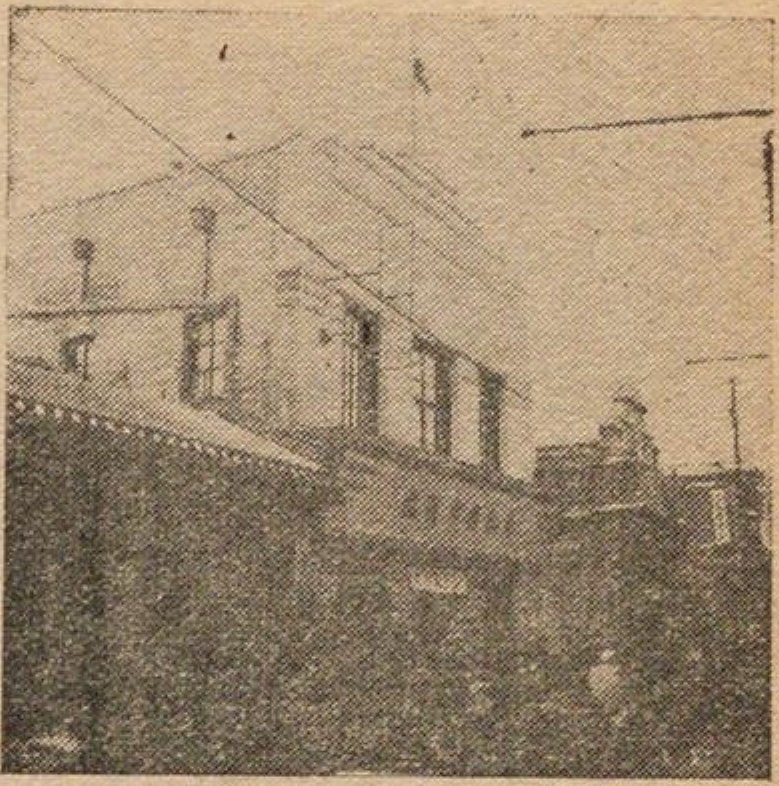
北京の映畫館（「風と共に去りぬ」上映中）

*

學生優待の日曜マチネーは當時銅貨二十枚で見せたもので、「制服着用者に限る、但し、制服を着用せざると雖も、良心に從ひて學生たる事を主張する者に對しては、その自信を尊敬し、敝院敢て察問を加へず」とある。

さてこの新しく出現した電影院で如何に秩序を保ち從來の公德心を改善すべきかに頗る頭を惱ましたらしく、論文を募集した位だ。一等當選論文では「拍手を禁止する辨法」を論じてゐる。その爲には、餘り滑稽な映畫は上演するなと結論してゐるのも愉快である。三等の論文では、公德心の缺乏してゐる左記の人物の入場を禁止せよとて、下等社會人物と未成年者の次に軍人と列記してゐる。當時の中國軍人と言ふのは、餘程分を守らぬ流氓が多かつたと見える。

やがてジンタの音賑かに（とは言へ當時眞光では帝政ツアールの宮廷樂師ループ氏及びその夫人のオーケストラをオーバチュアに採用してゐたのであるが）スクリンに華かに登場したのは李麗潔舒、巴色媽演ずる所の哀艶巨篇「賴婚」であつた。日本流に言ふと



北京支那映畫常設館

かの懐しの名畫リリアン・ギッシュとリチャード・バーセルメスの「東への道」である。「まあ何て事を仰有るの？妾は貴方のものよ、夫であり妻である妾達が、人の噂をどうして恐れるんですの？　それに妾達の愛の結晶ももう直ぐ生れてよ」とかの想ひ出の名解説が流石に此處は文字の國だけあつて、

「惡、是何言、余身已屬君、名分既定何畏乎人言、且腹中一塊肉、會當呱呱墮地也」

と言ふ調子の解説で滿都子女の紅涙を絞つたから面白い。

＊

次いで飛來伯（ダグラス）の「三銃士」が封切されてゐる。おなじみ馬麗壁克福（メリイ・ピックフォード）の夫婿である。「孤女」（嵐の孤兒？）のが封切られたのは民國十二年九月で關東大震災の實寫が特報ニュースとして上映されたのも此頃であつた。懐しのルス・ローランド孃の活劇物が「森林女傑」の題名で當時の摩登小姐をやんやとあふつたのは同年末頃の話だ。フート・ギブスンの「從軍趣史」、ハロルド・ロイドこと陸克の「大飯桶述略」、ベテイ・コムプソンの「情囚」、コンスタンス・タルマツヂの「愛之教訓」、ナタリイ・コバンコの「天方夜譚」、バスター・キートンの「魔宅」、ウイリアム・デスモンドの「情仇記」、アイリン・キヤツスルの「弱不勝衣」等すべて民國十二年代の眞光のスクリーンを飾つたフイルムである。

平安電影院は眞光より若干古くから外人の手によつて經營されてゐたと言ふ説があるが、此處では平安には言及しないでおく。

眞光・平安・中央三館合刊の華北影報などが生れたのは民國十六年頃である。此の影報から當時の洋畫を抄錄して見ると、ドロレス・デルリオとロド・ラ・ロツクの「復活」、ロナルド・コルマンとヴイルマ・バンキイの「愛之夜」、マリイ・フイルビンとイバン・モジュヒンの「孤城烈女」、ウイリアム・ボイドとマリイ・アスターの「九死一生」、ダグラスの「蒙面劍俠」、珍しい映畫ではグレタ・ニツセン、エルネスト・トーレンス、ウオーレス・ベアリイ、タイロン・パワー共演のラウル・ウオルシユ製作映畫「浪子回頭」(THE WANDERER)が平安で民國十五年四月封切られたのや、賈波林の「サーカス」ラモン・ナバロの「萬古流芳」(ベン・ハー)等がある。ダグラスの「兒女英雄」(ロビン・フツド)、ヴアレンチノの「四騎士」、ジョン・ギルバートの「歐戰大觀」(ビツグ・パレード)等恐らくサイレント時代の最後の華かさが北京にも一としきり輝いてゐたのであつたらう。

また、明確には斷定しかねるが、北京のトーキー時代は一九二九年頃にスタートしたらしい。

＊

映畫そのものの發展に伴つていろんなものが變つて來たが、題目の付け方や廣告の方法形式の上にも面白い變遷が見られる。「風と共に去りぬ」の「亂世佳人」はうまく付けたものだと感心したが、昔は「馬梨女郎傳」「黄金祟」「繁華毒」「窮不了」なんて些か變てこな題名が多かつた。

廣告の文句でも現今程流暢でなく、「大注意影界之破天荒」とか「畢生第一次排演之悲劇」「哀艷美術言情傑作」「節々令人感泣・絶無僅有之佳構」等生硬な言葉が多い。現代の廣告は概ね上海あたりで造られて來るので仲々スマートになつて來た樣だ。民國十年代には新聞の讀者數がひどく少かつたせゐもあつて、市内四十ケ處位に廣告を貼つてゐたものだが、今では電車が廣告して廻つてゐるし、新聞が大變弘く利用されてゐる。

說明書も最近では日本文のまで出る位に變つて來たが昔は一卷毎に分けて第一本しかじかかく〳〵てな調子の時代があつた。とは言へ一卷毎に休んでゐたのではあるまい。前五本、後五本等と記してある。文章も以前は全くの古文調で、現在の樣な電影獨特のスタイルが出來上るまでに相當の歳月を閲してゐる樣である。「天寒木落。寒風淒測。强行遠道。勉達東里」と言つた調子が今日では「發生戀愛。與傑克脫離關係。從此獨力謀食」式の文章に變つてゐる。

取りとめもなく書き列ねたが、何れ機を得て資料を蒐め、まとめて見たいと思ひつゝ、ペンを擱く次第。蕪雑切に諒承を乞ふ。

（筆者は北京市公署財政局顧問）

可園雑記

加藤新吉

客がきて、北京は、古自動車の展覽會みたいな所だ、あんなのに乘つてあるくのは面映ゆい氣がした、といふ話をしていつた。まつたくその通りである。北京にあるやうな古い型の車は日本ではもうどんな田舍に行つても見られない。我々はこんな車がよくも動くといふこと、支那人運轉手がよくも動かすといふことに驚かされる。彼等が丁寧に親切に動かしてゐるのを見ると彼等が科學的でない、機械に對して盲目であるとの評が果して當を得てゐるか否かを疑ひたくなり、一種の敬意をさへ感じたくなる。

滿洲事變後、滿鐵が北滿鐵道を接收した。そこには薪を焚く舊式の機關車が動いてゐた。露人機關士は零下三十度四十度といふ酷寒の中でそれを動かしてゐた。修理に修理を加へて兎も角無事に運轉してゐた。日本人だつたら既に早く何とかしたであらう車、使つてはみたが故障續出で手に負へなかつたボロ機關車をである。

歐洲を視察した機械技師が、あちらで新式機械を見て驚いたよりも、舊式機械をうまく使つてゐるのに驚いたと語つたことがある。日本みたいに古いは惡いの代名詞みたいになつてゐるのも困つたものだと彼は慨歎した。

つい二三日前に聞いた話であるが、某といふ獨逸人が赤坂福吉町に住んでゐる。その近所に坂道がある。毎日そこで自轉車がひつくり返る。石垣にぶつつかる。どうしても一日平均五六臺は潰れる。或日の如きは三臺もの自動車が潰れた。物資不足といひながらこれは一體どういふ日本人の氣持であらうかと其の獨逸人が不思議がつてゐるさうである。

これは戰場での話、そこでは二組の輸送隊が働いたが、甲の組では自動車の約半分が壞れて動かなくなつた。乙の組では最後迄九九％動いた。同じ日本人であるが、車を大切にするといふことに就いての豫ての訓練が違つてゐたのだと報告されてゐる。

斯うした話を考へ合せてみると、科學に對する知識、機械を動かす技術だけの問題ではなくて、科學を尊び機械を愛する心の缺如が、より根本的な問題として存在するかに思はれる。謂ふ迄もなく機械は概して新しく輸入されたもの、我等の父祖又は我等自身が丹精して發明し組立てたといふものは少い。他の作つた物、金で買つた物、結局借り物で、あり難いともかはいゝとも思はれないといふことであるらしい。

反之、それはそれは道具を大切にする大工を私は知つてゐる。彼は功利的な考方や節約の必要からさうしてゐるのではない。農民が一粒の米をも粗末にしないのと同じ氣持である。物資が足りないからの節約、なくては困るからの愛護運動とはその本質が違ふ。

非常時だ節約だと云ひながら平氣で機械を壞はしてばかりゐるやうでは機械文明は發達しない。さも獨自の思想精神があるやうな氣で機械文明を輕蔑してゐるやうな國民の裡に偉大なる明日の文化が發達しようとは思はれぬ。日本人が思想と科學とを以て東亞を指導するのはいゝ。が、科學に魂を入れ機械に血を通はせる心掛がないと、其の指導も怪しいものになる。現に日支事變前、支那には日本が世界に誇つて居る織機のどれよりも更に優秀な織機が支那人に依つて組立てられてゐたと謂はれて居る。（十二月廿三日東京にて）

北支暢談

仙人と科學

仙人と云へば我國では不老長生の神様として敬ひ畏れられてゐるが日本の仙人の先祖もどうやら支那らしい。支那の仙人は山の奥へ入つて金を採り、これを飲んで不老長生をすると云はれてゐる。又仙人は金を採取する外に銅を主材料として鐘鼓、刀劍、鋤、鍬、鉾、鏡など中々立派なものを作つた。例へば刀劍は銅七〇、錫一三、鉛八の割合の合金で、鉾にしても鋤にしてもその割合は現代の冶金の理論と大體において一致してゐたのである。又金銀を鑛石から吹分ける技術も、水銀或は鉛で金銀を熔かす方法なども今日の技術に比べて遜色のないものであつた。いまから二千年も以前に支那の仙人はこのやうな鑛物を吹分けたり、合金を造つたりする技術に携はつてゐたのである。仙人と云へば雲の上にでも住み霞や雲を喰つて神變不可思議な玄術を行ふ者であるかのやうに思はれてゐるが、仙人こそ、當時の自然科學者であつて、凡人の夢想だにしなかつた科學の世界に入り、人生に對して偉大な貢獻をあたへたのである。又廣く山間を跋渉して草木を調べ、藥草を採り、之を醫術に試みて人の病氣を治したのもその初めはやはり仙人であつた。仙人は卽ち鑛物學者、化學者である外、植物學者、醫學者でもあつたのである。



苦力——伊谷賢蔵筆

運河

中國文化は一名治水文化と呼ばれたり、或は中國社會史は水と人との鬪爭史であると云はれてゐる如く、中國の歷史も文化も河川と共に始まつてゐる。黄河は幾十萬年の昔から靑海、甘肅、寧夏、綏遠の黄土を運び出し現在の大平原を造り上げた。そしてこの黄河流域に中國人は初めて農業文化を生み出すことが出來たのである。しかし又一方毎年河床を變へて、純朴な農民達を苦しめた。「水を治むる者國を治むる」と云はれる通り、治水は歷代爲政者のもつとも頭を惱ました問題であり色々の悲喜劇を生んだ。夏の禹は治水事業の大成功者として後世の人々から慕はれてゐるが、その父、鯀は反對に治水の犧牲者となつた。黄河の大洪水に際し彼は龜と鴟に敎へられ、堤防を造らうとしたが水が増すばかりで洪水を遮ることが出來なかつた。そこで窮餘の策として上帝（神）の所有となつてゐる土を盜み、水を防がうとしたため上帝の怒にあひ、羽山と云ふところで殺された。ところが不思議にもその屍體はいつまでも亡くなつた時のまゝ、少しも傷んでゐないので屍を刀で剖いてみると中から玉のやうな赤ん坊が生れた——それが卽ち禹であると云はれる。

奸智にたけた隋の煬帝は交通運輸の便を圖るため多くの運河を開鑿した。これは地方の租税——主に米である—を洛陽に運ぶのが主な目的であつたと云ふ。初めに洛陽と黄河を結ぶ運河を開き、亘に抃水を經て淮水に通ずるものを開き、江蘇運河、衞河、大運河を開鑿した。そしてこれら運河の兩岸には楊柳を植ゑ、帝は龍の飾りのある船に皇妃や群臣を從へ、羊、數百頭に舟を引かせて洛陽から遠く揚子江岸の江都までも行幸したと云はれる。しかしこの様な豪奢な遊樂の蔭には數百萬の民衆の血と涙が祕められてゐるのである。

昔から中國では南船北馬と云はれ、北支に比べて南支河川の水運が開けてゐると云はれてゐるが、北支にも天津や濟南を中心にして縱横に開けてゐたのである。何と云つても鐵道、自動車の發達しなかつた十九世紀以前は物資の輸送、人間の移動は水運を最も便利とした。そして今日と雖も尙重大な役割を有してゐるのである。事變直前天津の發着貨物が鐵道百九十萬トン、水運によるもの百三十五萬トン、殆んど陸上交通に比肩すると共に陸運との連絡機關として重要な地位を占めてゐることがこの數字によつても伺はれるで

あらう。

北支における運航可能の河川は五千餘キロ、その内三千二百キロが現在華北交通會社によつて經營され、河川を通じて國内深く新時代の息吹きを傳播せしめ、地方產業の開發と治安の確保を促進してゐる。

シナントロプス

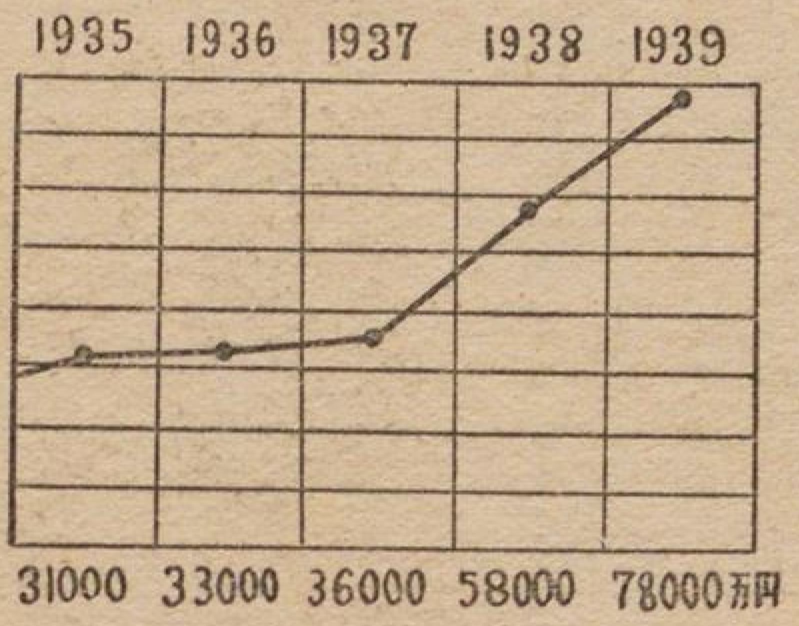
およそ四千年から五千年の昔、黃河の流域に美はしい文明の花を咲かせた漢民族は、今日益〻繁榮し四億以上と推定され、アジア東部の廣大な地域を占めてはゐるが、その人種としての發生地が何處なのか今尚疑問とされてゐる。バビロニアやエヂプトをその發生地だとする說もあり、ノアの子孫で、もと黑海とカスピ海との間の地に居住してゐたが、その後アルタイ山脈と天山山脈との間を通つて遂に山西省の南部に至つたと說き立てる人もある。ドイツの有名な地理學者であり支那學者であつたリヒトホーフエンは支那民族の發生地を東トルキスタンの西南和闐のオアシスとなしてゐる。又その起源を中央アジアだとする說もなかなか多い。

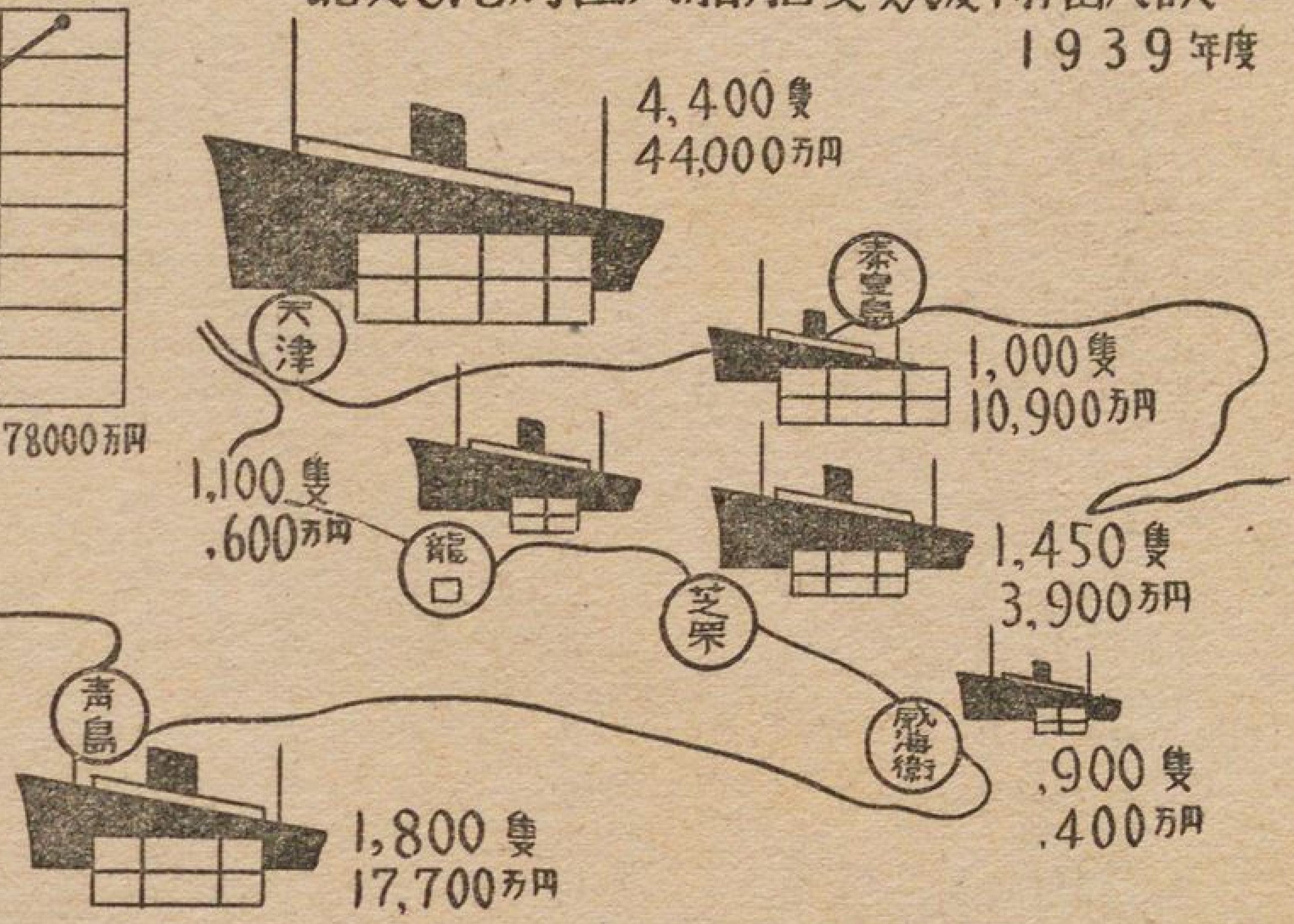
然しこの漢民族の移住して來ない、今から四五十萬年前既に支那には人類が生存してゐたことが今から二十年程前に確められた。スウエーデンのアンダーソンと云ふ人が、北京の西南方約五十キロの地點、西山の山麓にある周口店の石灰洞で化石の採集調査に從事してゐたところ、偶然にも石英の一片が發見された。その附近には石英のあるところがないので、人手によつても ち來たされたものと見るより外なかつた。ところがその翌年一行中のツダンスキイ氏によつてその洞窟內より古代人類の小臼齒、大臼齒各一個が發見された。その後一九二八年に齒、頭蓋骨片、下顎骨が發見され、その翌年の一九二九年には斐文中氏によつて完全な頭蓋骨が發見された。そしてこれは世界最古の人類の遺骨と認定され北京支那人（シナントロプス・ペキネンシス）と命名された。尙このシナントロプスはジャバ島で發見されたピテカントロプス人やヨーロッパで發見されたハイデルベルヒ人、ビルトダウン人などと共に最古の人類でありピテカントロプス人よりもいくらか進步してゐたと推定され、既に火の使用を知つてゐたことも確かめられた。このシナントロプスが、果して今日の支那人の祖先であるかどうかは全く知る由もないが、ただ最古の人類が今日の支那の地にも住居してゐたことは明らかになつた。

虞美人草

支那の統一と云ふ大事業を完成した秦の始皇帝が死亡し、二世皇帝が立つと今まで始皇帝の壓制に苦しめられてゐた諸侯は各地に蜂起し、天下は麻の如く亂れた。安徽省に起つた陳勝・吳廣、山東省の田儋、河北省の韓廣など、中でも最も有名なのは項羽と劉邦（後の漢の高祖）である。

最後に項羽と劉邦は各〻諸侯を征服し幾回となくしのぎをけづる戰ひを續けたが、遂に劉邦は名參謀張良、韓信等の謀を用ひて項羽の軍を垓下（今の安徽省靈壁）に圍んだ。項羽としてはまさに乾坤一擲の戰ひなので、死力を盡して戰つたが、つひに力及ばず、項羽の運命は今や全く絕望となつた。彼がその寵姬の虞美人に舞を舞はせ、彼もまた悲壯一聲「力山を拔き、氣は世を蓋ふ。時利あらず、騅行かず、騅行かず、いかにすべき、虞や、虞や、汝をいかにせん」と歌つたのは實にこの時であつた。「騅」とは項羽の愛馬である。この悲歌を聞くと、侍臣達は何れも眼を伏せて項羽を仰ぎ見る者がなかつた。虞美人もそこで死んだ。その亡骸を埋めた塚の上に、可憐な姿で咲き初めたのが虞美人草であると云はれる。





北支の主要港としては秦皇島、天津、龍口、芝罘、威海衛、青島と隴海鐵道の終端港として重要な地位を占むる連雲港の七つを數へ得るが、現狀は何れも設備貧弱で、北支經濟文化の發展を期するためには今後港灣の大擴充を行ひ、陸運と海運との有機的聯關を計ることが焦眉の急務とされてゐる。

秦皇島は開灤鑛務局の私設港で英國の利權に屬し一九〇〇年に五〇萬ポンドを投じて築造したものである。現在でも船繰順調ならば年四百八十萬トン乃至五百萬トンの呑吐能力ありと稱されてゐる。

天津港は呑吐能力年四百萬トンと稱されてゐるが、事變後華北交通會社の手で天津特別三區及び塘沽に新埠頭を築造した結果、その呑吐能力は稍大を加へた。しかし本港は河港の常として河口バーに制約せられて大船巨船の出入が不可能であり、大港灣としての資格に缺けてゐるので、現在塘沽突端の海面に新港を築造中である。數年後にはその偉容を現し、北支の中心港としての活躍が期待される。現在天津特別三區碼頭、北砲臺碼頭、塘沽、新河、招商局碼頭が華北交通の手によつて經營されてゐる。

青島港は膠州灣内の一角にあり、北支には得難い天然の良港で、事變前におけるその呑吐能力は年三百五十萬トンと稱せられた。本港は曾てドイツがバグダツド鐵道の終端港として、五千萬マークを投じて築造經營に當つたものであつたが、このドイツの雄圖は第一次歐洲大戰における結果によつて脆くも潰えたのである。

連雲港は隴海鐵道の終端港として舊國民政府が事變前約一千萬圓を投じて和蘭築港會社をして築造せしめたものである。同港は甘肅及び陝西、河南、江蘇の大背後地を持ち、且つ、日本より最短距離五〇〇浬の地點にあり、港灣の條件にも惠まれてゐるので、その將來を期待される。同碼頭の經營は昨年十二月一日より華北交通會社の手によつて行はれてゐる。

昭和十六年一月十五日印刷納本
昭和十六年二月一日發行

二月號
（毎月一回一日發行）

編輯者 北京・華北交通株式會社資業局 加藤新吉
發行者 東京市麴町區三番町一 長谷川巳之吉
印刷者 小石川區久堅町一〇八 共同印刷株式會社 大橋松雄
發行所 東京市麴町區三番町一 振替東京六四二二三番 電話九段(33)一四一五番 三三四四番 第一書房

一冊定價㊕三十錢（郵送料一錢五厘）
一ヶ年分 金三圓六十錢

廣告取扱 大阪市西區京町堀上通一丁目二五
一手取扱所 一新社 電話土佐堀九三九


NISSEN
痒い皮膚病に
ムナバールは化學的に合成したる有機硫黄化合體ヂメチル・ヂフエニーレン・ヂスルフイドにして皮内に滲透して強力なる殺虫作用を發揮し、同時に優秀なる止痒消炎作用を呈する理想的皮膚病薬なり。
【特徴】
一、用法簡便且つ無害・無刺戟にして何等副作用を伴はず。
一、嫌悪すべき臭氣なく且つ衣服類を汚損することなし。
一、品質純良にして約二六%の硫黄を含有す。
適應症
疥癬・頑癬・濕疹一切・白癬・水蟲・面皰・汗疱・陰嚢頑癬・皮膚化膿疹・傳染性膿疱疹・皮膚瘙痒症其他寄生性及瘙痒性及皮膚諸疾患。
包装
一〇瓦(瓶入)
二五瓦(〃)
一〇〇瓦(〃)
五〇〇瓦(罐入)
一〇〇〇瓦(〃)
ムナバール
Munaval
ムナバール
日染
製造發賣元 日本染料製造株式會社
大阪市此花區春日出町
一手販賣元 株式會社稲畑商店
大阪市南區順慶町二丁目

V.B1



胃腸病・脚氣
榮養・發育…に

V・B1の高單位療法

强

カメタボリン錠は、强力且高單位のV・B1を含有し、V・B1の缺乏に基因し特に大量の補給を必要とする胃腸疾患、脚氣、榮養不良、發育障害等……の諸疾患に用ひて胃腸機能を快調にし、弛緩せる胃腸の運動を活潑にして食慾を增進し、病衰せる細胞機能を賦活して榮養狀態を良好ならしめ、脚氣を治療、豫防し發育を促進して所期の効果を收む。

ビタミンB1の含有量は一錠中に〇・五ミリグラム

〔適應症〕 脚氣の治療と豫防―衝心脚氣、妊娠脚氣乳兒脚氣　胃腸無力症、食慾不振。肺結核、肋膜炎肺炎其他の熱性疾患。病中及び恢復期の患者。妊・產・授乳時の榮養補給に。

〔國內價格〕 一〇〇錠（三円五〇） 三〇〇錠（一〇円）

☆酵母を添加せる「メタボリン錠」もあり

製造發賣元　株式會社　武田長兵衛商店
大阪市道修町

强力メタボリン錠

昭和十四年七月四日第三種郵便物認可　昭和十六年一月十五日印刷納本　昭和十六年二月一日發行（每月一回一日發行）第二[illegible]號

北支

㊔定價三十錢